
MMO ! ~ Massive Memories Of 【 ! 】 ~

甘和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MMO！ ～ Massive Memories Of 【！】 ～

【Nコード】

N2359Z

【作者名】

甘和

【あらすじ】

オンラインゲームのディレクターである川島は、テストプレイ中にゲーム世界に呑み込まれてしまった。

少年キャラの姿となった彼は、ゲーム内で会うことを約束していた恋人を探し、冒険の旅に出る。

自らが創作した鬼軍曹に鍛えられ、NPCに助けられて、同じくこの世界に迷い込んだ仲間と出会いながら、旅を続ける。

数々の危機も、開発者ならではの知識で乗り越えていく。しかし、

魔物化プレイヤーの襲撃や謎のアイテム出現等、開発を統括していた彼ですら、知らない事態が次々に襲ってくる。

そして、ついに「最難関ダンジョンで、恋人を目撃した」という情報を手にする。

再会は果たされるのか？ この世界の正体は？

無数の謎と想いを抱えて、冒険はクライマックスへと突き進んでいく。

BLT!

1

川島和彦『会社出るのは早くて六時…』

ゆりか『六時半でOK?』

川島和彦『んー、会議次第』

ゆりか『じゃ、会議おわりに電話してよ』

川島和彦『なんで、そんなに時間を気にするんだよ』

ゆりか『帰宅に料理のできあがり時間を合わせたいの』

川島和彦『えと、今日、なんかの記念日だっけ』

ゆりか『一緒においしい物を食べたいだけ。それと大事なお話』

川島和彦『気味悪いなあ。チャットじゃ無理なの?』

ゆりか『直接会って話したいの。ごちゃごちゃ言わずに電話よろ』

川島和彦『らじゃー、そうする。』

ゆりか『あとさ、お花屋さん寄って、ハイビスカス。食卓に飾りたい』

川島和彦『ん、わかった、メモっとく。いま、ゲームしてんの?』

ゆりか『うん、絶賛ログイン中!』

川島和彦『俺もあとで入ろう。キャラは?どこにいるの?』

ゆりか『女道家ユーリカで、HOF』

川島和彦『待ってておくれ。調子どうよ』

ゆりか『なんか、重いよ…』

川島和彦『お?ちよい待ち、監視ツール立ち上げる』

ゆりか『なにそれ?いかつい名前』

川島和彦『ゲームの混み具合をエリアごとに表示するそふとっえあ』

ゆりか『うえあ』

川島和彦『うえあうえあゝと…えつと、ユーリカ様がいるサーバは…なるほど』

ゆりか『わかった?』

川島和彦『あたた、踏み台にされてんな、ゲームサーバ』

ゆりか『脚立の代わり?』

川島和彦『そうそう、ロッカーの上に置いた機材を下ろそうとって、なんでや』

ゆりか『ねん!』

川島和彦『どつかの悪い人が、うちのサーバを経由してネットにアクセスしてんだ』

ゆりか『何のため?』

川島和彦『身分を隠すため。違法ダウンロードとかハッキングとか悪口とか』

ゆりか『あー、やばいところに手を伸ばすための、踏み台!』

川島和彦『正解』

ゆりか『なんともできないの?アクセスをはじくとか』

川島和彦『俺じゃ無理。稼働中のサーバはいじれない』

ゆりか『ディレクター様なのに…』

川島和彦『ディレクター様だから、いじる権限のある部下に指示は出せる』

ゆりか『指示出せー』

川島和彦『腕利きの部下様は午後四時出社予定』

ゆりか『ふみゆ』

川島和彦『それまでに状況を調べて、すぐ会議を開始可能にするのが俺のお役目』

ゆりか『がんばれ』

川島和彦『うい、んじゃ』

小津慎二『おつかれさまです』

川島和彦『おろ。噂をすれば!』

小津慎二『噂せんでください。えーと、例のバグ。打ち合わせは四

時で大丈夫ですか？」

川島和彦『かまわんよ。なんか、新情報あるの？』

小津慎二『ええ、原因が特定できたかも知れないです』

川島和彦『さすが、腕利きプログラマ。じゃあ、四時に待ってる』

小津慎二『ういっす。では、のちほど』

川島和彦『シーユーレイター』

俺はチャットソフトを閉じた。

次にヘッドフォンを取り、液晶モニタから顔を上げた。

三十席ほどの机が並んだフロアだが、スタッフはまばらにしか見当たらない。

静かだ。

机上のヘッドフォンからネットラジオの音が薄く響いているほどに。

休日午前中の弱小オンラインゲーム会社なんてこんなものだ。

今日のメンバーは、ユーザーサポート系の学生バイトであるチイちゃんと、手が遅くて休みを返上するはめになった新人デザイナー、そして、不具合報告への修正対応に出てきたディレクター兼メインプランナー兼データメイカーの俺のみ。

俺の席はフロア全体を見渡せる場所にある。上座といえば聞こえはいいが、エレベーターホールからも、トイレからも、コーヒースーバーのある炊事場からも遠い。

おまけに窓を背にしているので、夏は暑く、冬は寒いという特等席だ。

コーヒーマシン一杯取りに行くにも、フロア縦断の遠征に出かけなきゃならない。寄り道なしで往復三分程の壮大な旅だ。旅の途中でスタッフを冷やかすから、実際にはその三倍の時間はかかってしまう。

おそらく金曜の夜に淹れられたのだろう。

じつくりことごと煮詰まったコーヒーマシンを片手に、今日も旅から戻ってきた。

そしてチイちゃんの隣に座った。

「おつかれー」

「おつかれさまです」

「チュートリアルの不具合は、あれから報告あった？」

「メールは、前回のアップデートから四日間で四通ですね」

「意外と少ないな。とりあえず、見せて」

「はい」

ゲーム開始直後、チュートリアルのエリアに魔物が現れて襲われる、という不具合が頻発している。チイちゃんの休日出勤もそのせいだ。

俺は立ち上がり、彼女のモニタを覗き込み、報告という名の苦情メールを読んだ。

どれも同じ症状だ。

どのメールにも「二度とやるか。バカ」という宣言と罵倒が表現の差はあれど含まれている。

ゲーム開始直後のキャラクターは、装備も能力も貧弱だ。

その上、ユーザーは操作に慣れていない。最弱な魔物相手にすら勝てる見込みはない。

そりゃ腹が立つよな。

俺がユーザーだったら、報告メールも出さずに別のゲームを立ち上げるよ。

四通のメールは、実質、軽く四十通分のクレームに相当すると思っ
ていいだろう。

「ちなみに、電海への同内容の投稿は、四日間で百二十五になりま
す。」

「うっ、それきついな、泣きて」

電海、正式名称「電海DSS（Decision Support
System：意志決定支援システム）」。

うちの会社のドル箱ソフトだ。

開発費も運営費もギャンブルなオンラインゲームを続けられるの

は、こいつが稼いでくれているおかげ。俺は親しみを込めて、電海さんと呼んでいる。質問や相談を入力すると、電子の海から知識と情報を集めてきて、最適解を生成、もしくは、選択肢を提示してくれる優れ物だ。

検索エンジン、人工知能、シミュレーション手法、その他もろもろを詰め込んだ特許の塊。企業やら大学やら政治家の事務所やらで活躍している。わかりやすくいえば、お偉い方々のブレンソフटना。

電海さんのインターフェースは、我らがゲーム内にも搭載されている。

こっちはこっちで、一応、会社の看板ビジネスなんですね。社内コラボってわけだ。

プレイヤーは自由に質問、相談、調べ事、罵倒、いたずら、愚痴を投稿可能だ。

みんな、適当な質問としては結構遊んでいるし、そこそこ好評。欲をいえば、そのお力でユーザーサポートがちょっとした楽になればいいんだが。

「ちなみに、電海さんはなんて答えている？」

「えーと。「それはバグです。開発担当に報告するのが最善策です」ですね」

「確かに、最適解だな。もうちょっと、哲学的なセリフを返せば格好いいんだが」

「設定次第では、禅問答だってしますよ。えーと……」

チイちゃんが電海さんの設定画面を立ち上げる。

「哲学モードだと」「その理不尽こそチュートリアルである。これはゲームのチュートリアルであり、チュートリアルというゲームだ。嘆くより、それから何を学ぶかを見つけるこそ大切である」。

禅モードだと「魔物が出るフィールドにフタをしたのか。魔物が出ないフィールドに出していたのかを確認するのが最初の一步」。えーと、それから……」

「もういいや」

「モードは色々ありますけど、どれもクレームが増えそうだから使いません」

賢明だ。電海さんもそう答えるだろう。

「それにしても、いやなバグですよね」

「ん？」

「初心者がやめちゃうのは痛いでしょう」

「ああ」

アルバイトの立場でユーザーが逃げるのを憂いてくれるとは…

なんてタイトルへの愛が溢れている子だろうか。俺は目頭が熱くなってしまった。

「前にいいましたよね？私、BLTが好きで、このバイトを選んだんです」

BLTとは、このゲームソフトの略称だ。

正式名称は【バトル・ランド・テラ】（Battle Land Terra）。

名付け親も、ゲームの中身、つまり世界観やゲームシステム、モンスターの設定、キャラクターのセリフやアイテムの説明文に至るまで、俺がベースを作った。

日本史好きな社長を説き伏せて、ファンタジー世界観を通すのは一苦労だったが、おおむね思い通りのイメージを具現化できたオンラインRPGだ。

三年以上絶え間なく、スタッフと作品世界を育ててきた、俺の代表作であり、夢と愛と汗の結晶。我が子のごとく愛している。

その手塩にかけた作品に感動したユーザーが、同僚として肩を並べるようになる。

クリエイター冥利に尽きるとはこのことよ。

「私が大好きな世界、これからもよろしく願いますね」

チイちゃんはニコツと笑って軽く頭を下げ、仕事に戻った。

肩越しに見たモニターの様子では、休日出勤の割増バイト料をも

らいながら、会社でB L Tのプレイを始めたように見えたが…何、大目に見るさ。愛すべきユーザー上がりのスタッフだ。

俺は少しぬるくなったコーヒーを手に席まで戻った。

深呼吸を一つ。プログラマの小津君が出勤してくるまでの作業予定を立てることにした。

まだ、午前十一時前だ。一時まで新規キャラクターを作つてはチユートリアルまでのプレイを繰り返し、不具合が再現するかを確認。ランチはコンビニで調達して、三時までさらに繰り返しプレイ。そこから一時間で会議書類をまとめる。

タイムスケジュールはそんなところか。

今日、問題の症状が出なくても、小津君が無駄足を踏まないようにできりゃいい。

「よし！」

小さく気合いを入れて、俺はB L Tを起動した。

まずは新規キャラクターの作成だ。

キャラクターネームはどうしよう。仕事でのプレイじゃ、やる気のない名前を付ける開発者が多い。「テスト000」とか、「ああああああ」なんてね。

連続で何キャラも作る都合上、そうなるのはわかるけどさ。サービス中のゲームに入る時はちょっと考えて欲しいよな。一般のユーザーが適当な名前のキャラを見かけたら興ざめだろう。

俺はキャラクターネームを付ける時、テーマを決めることにしている。

今日はミュージシャンシリーズで行こう。

そうだな、さっき、ネットラジオで流れていたアーティストから拝借するか。

■キャラクターネーム：コバーン

性別：男

職業：剣士

丸顔、短くて黒い髪、太い眉、丸い目、小柄…最後は声か。プレイヤー用キャラクターをお願いした声優さんで、もともとギャラが高かった、少年ヒーロー向けの大御所で決定だね。

さて、いかにもRPGの主人公っぽい少年キャラクターに仕上がった。

すべての準備は完了。では、ENTERキー入力！

え？

？

！あれ？

やべっ？

ゲームが始まると同時に、全身が揺れた。

地震か？

いや、違う。

熱い、寒い、震える、碎ける。

俺、どうなったんだ？

目の前が真っ赤になった。すぐに真っ暗になった。

全身が重い、いや、身体感覚が消えていく？

意識がクリアになる、いや、遠くなる？

その両方が同時に起こっている。

すべてが、薄くなりながら濃くなっていく？

悲鳴が聞こえる？…俺が叫んでるのか。

なんで？身体がないのに声を出せる…いや、身体は、ある。

…喉も口も動かない…

ああ、心が叫びたいのか…何を？

つまり、どうなったんだ？

？

！

あ…

2

「ごぎゅごぎゅ」

不気味な、泥の中を長靴で歩くような音が近づいてくる。

「ごぎゅぎゅごぎゅ」

これは確か、人喰いカエル、フロツギーの鳴き声だ。体長は一メートル、ワニガメのように鋭くてバカでかい口を持ち、獲物を食いちぎる。ゲーム序盤の難敵だ。

「ごぎゅごぎゅ、ごぎゅごぎゅ」

逃げたいのだが、身体がいうことを利かない。

金縛りにあったようだ。指先も動かせず、まぶたも開かない。

「ごぎゅごぎゅ、ごぎゅごぎゅ、ごぎゅごぎゅ」

背筋がゾゾゾとする。生理的に不快感をもたらす響きは、どんどん大きくなる。

「ごぎゅごぎゅごぎゅごぎゅおぎゅ…ぎゅ…」

すぐそばで、音が止んだ。

同時に、やっと目が開いた。

視界一面に赤黒く湿った肉色の幕が見えた。

それが何かを理解する間もなく、肉色の幕は縦に二つに裂けて、真つ赤な光の粒をまき散らしながら消えていった。

「若いの。災難だったな」

消えゆく光の粒の向こうから、老年の男性が顔を突き出し、声をかけてきた。

真四角のいかつい顔に白髪、風貌に似合った、しゃがれ気味の低音だ。

「どうした。魂が抜けたか？なんかいつてみる」

俺が声を出せないでいると、しゃがみ込んで、頬をペチペチと叩いてくる。

うん？どこかで見覚えのある顔。誰だっけか…

指先に意識を持っていく。どうやら動くようだ。

口を開ける、声を出そうとしたが、喉に力が入らず、呼吸しか出ない。

「ひきつけを起こしたのか？坊や…あせるな。ゆっくり、深く、息をしろ。」

男の指示に従い、何度か深呼吸を繰り返した。

「下腹に力を入れて、一気に吐き出せ！」

いきなり、背中を叩かれた。

「あーっ」

あれ？俺の声、こんなに細かったか？高かったか？

「もう、大丈夫だ。これを呑んでおけ」

何かを口に放り込まれた。大きめのあめ玉程度の大きさだ。それは口中で一気に小さくなり、喉を滑り落ちるように腹に収まった。

次の瞬間、ヘソの辺りから全身へパワーがみなぎってきた。

「わお！」

なんじゃ、こりゃ！

「効いたな。もう、話せるだろう」

「あ、あの、ここは？」

やはり、高音だ。まるで、子どもの声だ。

「ここは【始まりの地】。BLTに足を踏み入れた新米冒険者が必ず通る場所だ」

そうか、思い出した。

この男は、チュートリアル教官のルーゴア。俺が作ったキャラクターだ。

黒くて長いコート、白髪、右手に提げた青龍刀、鋭い目つき、想像の男がゲームに出るままの姿で俺の前に立っている。

「ルーゴア…か？」

「ほう、新米がわしを呼び捨てとはな。礼儀知らずな坊主だ。いかにも、わしがルーゴアだ。この世界の全冒険者のマスター。坊やは

三万五千二百五人めの門下生つてことになる」

俺は地面に手をついて、上体を起こそうとした。

立ち上がろうとするが、バランスが取りづらい。三半規管がちゃんと働かない感じだ。

「若いの。立てるな。よし。じゃあ、わしの家まで付いてこい」

ルーゴアはゆっくりと太股に歩き出した。子ども体型の俺とは身長差が三十センチはある。おまけに歩き慣れてないというか、足下がおぼつかない。離れないようにするだけで精一杯だ。

「ちよつと、待って」

「甘えるな」

ルーゴアは立ち止まり、こちらを振り返った。

「ん？あんた、もしかして」

俺の顔をまじまじと見つめてやがる。なんか、ついてんのかよ。

「…まあいい。歩くのも訓練だ。そのうち慣れる。見失うなよ」

それから、二キロほど歩いただろうか。

途中、二度、フロツギーが現れたものの、ルーゴアが剣を一閃して追い払ってくれた。

目的地に辿り着いた頃には、歩き方のコツもわかってきた。

足の裏全体で地面を踏んづけないと不安定なようだ。土踏まずがないからかね。

柵で囲まれた広い敷地の中央に、こぢんまりとしたログハウス風の小屋が建っていた。

柵の中には、剣や槍、宝箱、木製の魔物や剣士の模型など、様々な戦闘訓練用のアイテムが設置してある。かつて、俺がデザイナーに指示を出した通りの配置と大きさだ。

そして、そこに立つ老練の鬼教官ルーゴア。

俺のイメージがすべて等身大で再現されている。感動で目が潤んできた。

「遠慮するな。そこに突っ立ってられても、邪魔なだけだ」

ルーゴアは玄関のドアを大きく開けて、立ちすくんでいる俺に、家へ入るように促した。

口調が強めなのは、怖じ気づいているとも思っただろう。まさか、猛烈に感動しているからとは思わないよな。

俺は、促されるまま、小さな木製テーブルについた。

「わしは訓練の準備をしてくる。声をかけるまで休んでいる。逃げるなよ」

そう凄みを放ちながら言い残し、教官は外へ出ていった。

俺は、部屋の中を見回した。

飾り気のない、しかし、年季の入った良い味の家具が並んでいる。そうか、ルーゴアはアンティーク家具と革製品が趣味だったな。

かつては殺風景な部屋に住んでいたが、冒険者を引退し、後進の育成に身を捧げると決めてからは、優しい風合いの物を身のまわりに揃えることにした…という設定だったはずだ。

落ち着いたからか。やっと、まともな感情が湧いてきた。

悩みモードへ突入だ。

なんで俺、ゲームの中にいるんだよ。

でも、しかし、だからって、どうすりゃいいものか。行くあてがあるのか。どこに行ってもゲーム世界だろう。弱っちい少年キャラが出歩いてても魔物の餌食になるだけだ。

相談する？ルーゴアに？

いや、彼に訊いてどうなる？ただのゲームキャラだ。

人間くさく見えても役割をこなしているだけじゃないか…参ったなあ。

「おい、こっちへ来い」

開きっぱなしのドアから、しゃがれ声が聞こえてきた。

「どうした。聞こえないのか」

声を荒げて、こちらへやってきた。

「立てよ。びびるな」

びびっているわけじゃない。悩みモードから気持ち切り替わってないだけだ。

「おらっ」

首根っこをつかまれた。

「いや、あう、ああ。ル、ルーゴア。ちょっと、待ってくれ」

「ああっ？」

露骨ににらみ付けられた。

悪いことしてないよ、俺は。

ビギナーユーザーにそんな顔で接するなよ。オンラインゲームだって客商売なんだぜ。

「ほれ」

「あいたっ！」

いきなり、手を離されたので床に尻餅をついてしまった。

「…ちよっと！」

そう強くつぶやいたルーゴアは、再び俺の首根っこをつかんだ。

「ほら、ちよっと、待ってやったぞ！外へ出る！」

おっさん、どこの不良だ。引つ張るな、いってーな。

この暴力教官、親の顔が見たいもんだ。

そう、心で叫びつつ、口では、あ行の擬音を連発しつつ、俺は外へと運び出された。

たった小一時間だったが、凄まじい密度だった。

もう死ぬと思った回数は数え切れない。なにしろ、実際に魔物を呼び出し、戦闘をさせて、俺が死にそうになったらルーゴアが助けに入るという教育スタイルなのだ。

魔物を目の前にして、ルーゴアの指示を聞き、体さばきや武器の扱い方を学んでいく。

ビギナーの体力でだ。無茶もいいとこ。

でも、実は…こういう教育方針にしたのは誰かといえば、俺なんだよな…

飽きずに面白くチュートリアルをこなせると思ったから、こうしたのだが。

ああもう、あの頃の俺の馬鹿野郎。

カリキュラムが終わり、部屋に戻ってきた。

俺はピヨピヨとよるめく足取りで椅子に座った。

ルーゴアが、目の前に小さな青い玉を置いてくれた。

「それは出会った時に、あんたに吞ませたのと同じものだ。ブルービーンズ、魔法で精製された丸薬さ。体力を最大限に回復してくれる」

ああ、よく知っているぜ。

「こいつは鉄よりも固い。凄まじいパワーを圧縮してあるからな。しかし、体内に入るとすぐに溶けて効果を現す。よくできた代物だ。さあ、吞め。ヘトヘトだろ！」

俺は残った力を振り絞って、右手を伸ばし、青い玉をつかんだ。

呑み込むや否や、一気に体力が回復する。はつきりいつて、快感だ。たまらん。

「わお」

声に出ちまう。

「体力回復以外にも、魔力回復のレッドビーンズ、巨大化のイエロービーンズ、透明化のピンクビーンズ、速度向上のグリーンビーンズとかな、色々な種類がある。見つけたら、種類がわからなくても持てるだけ持ち歩くといい。何のビーンズかは、町やダンジョンで鑑定人を見つけて訊くのがいいだろう」

ビーンズの色と効果の組み合わせなんか、基本的な物しか覚えちゃいない。

考えたのは三年も前だし、特殊な物はそうそう手に入らないし、

なくても進められるし。

「さて、と、お約束はここまでだ」

鬼教官は俺の向かい側に腰掛けた。

にらみ付けてやがる。小学生なら、十人中九人は泣き出す目つきだ。

「この後、いくつかのビーンズとしゃばい武器を渡して追い出すのが、本来のパターンなんだが…あんたとは少し話をしたい」

「え？」

「コバーン。この世界の創造主ともあろうお方が、なぜ、ひよっこ
の姿をしてるんだ？」

わかっていたのか。

「人が悪い。いつから、気づいてた」

「最初からだ。新人冒険者の能力を見て、特性に合った育て方を
するのが、わしの役割だ。そいつの得意技や性格、隠している特長
で感知することができる」

「透視能力か？ルーゴアがそんな力を持ってたっけ？」

「そんなじゃない。そこまでの情報を得る権限を持っているって
ことだ。思い出せよ」

もしかして、プレイヤーがユーザー登録時に入力するあれか。確
かに、認証情報やアンケートの内容を、ルーゴアのセリフ分岐に影
響させた記憶がある。

「ルーゴア。俺はなんでゲームの中に入っちゃったんだろう？」

「おや。わざとやってるんじゃないのか。すると、ここに居るのは
事故…か？」

「う、うん。そうだ。俺はどうすりゃいいんだ？」

「ふむ。そうだな…答えはシンプルだ。いいか。元へ戻るかわか
らない。この世界で過ごさねばならない。今のあんたは弱っちい。
そこから、導き出される結論はひとつ！」

「うん」

「きっちり鍛えてレベルアップして、なんとしてでも生き延び、世

界を旅して、出口を探すことじゃないか？」

ああ、正論だな。役に立つが、きつい。くだらないが、反論のしようがない。

そうだよ、そういう物言いのキャラクターだよ、あんたは。

「今日は、話ができで光栄だった。お礼に特別サービスだ。最初の村までお供しよう」

ルーゴアはさっと立ち上がり、扉へ向かった。

「そうだ。コバーン、壁にかかっている剣や槍から、好きな物を持っていったいいぞ」

和洋大小、様々な武器がある中、俺はシンプルな日本刀をチョイスした。

シンプルかつ機能的で美しい。こういう武器が好きだ。

ゲーム内での価値は、ゴテゴテと飾りが付いた巨大な剣の方が上だが、好みじゃない。

商売上、実装はしているけどさ。あれは悪趣味だと思うよ。

好き嫌いは別にしても、そもそも今の俺は、豪華な武器を装備できるレベルじゃないがね。

村への道すがら、ルーゴアから色々な話を聞いた。

四日前にチュートリアル付近の結界が壊れてから、魔物が出るようになったそうだ。

「あれがその残骸だ」

ルーゴアの指す方には、地面に描かれた魔方陣らしき模様と斜めに傾いた石碑があった。

魔方陣をよく見ると、半分はかすれて消えている。

「結界が壊れた理由？ 知らんな」

「うわっ！」

いきなり、まぶしい光が差してきた。

ルーゴアは、まるでハエでも追い払うかのように、舌打ちしながら剣を振るつ。

硬い紙を丸めるような音を立てて、銀色のコウモリが落下した。片方の羽をなくし、悶絶している。

「ミラーバットだ。光を反射して、目つぶしを仕掛けてくる。こいつの羽は魔法をはね返す。無闇に攻撃魔法を撃ったら命取りになるぞ。覚えておけ」

親切にありがとう、ただ、覚える必要はない。俺が考えたんだから。

その後も、魔物はちよくちよく出現した。

長い牙のカエル魔物ファンギーや巨大甲虫マンセクトなど、初心者には難敵ばかりだ。

ルーゴアがやつつけてくれるとはいえ、出現してくるたびに話は中断されるし、たまに攻撃が当たって痛いし、気分のいい存在じゃない。

ただ、嫌なことばかりでもなくて。

「こいつらが落とした金やアイテムはやるよ。取っておけ」

ルーゴアの恩情で、控えめに剣を出すだけの身にしては、結構稼がせてもらった。

村の入口で、教練タイムは終わった。

「ここまでだな。わしはいつでもここにいる。そのうち訪ねて来てくれ」

「ありがとう。ところでさ、ちょっと聞いてもいいかな」

「ああ、なんでも」

「やたらと喋ってたけどさ。あんたに、こんなたくさんセリフを書いた覚えはないぜ」

「テキストの量なんて問題じゃない。わしらキャラクターってのは、作り手のイメージさえ鮮やかなら、データ量に関係なく、はつきりくつきりと存在しちまうんだ。シナリオを書いていて、興が乗ってくるとガンガン筆が進むだろう？ああなった時には、キャラクターは文字になった以上のことを考え、行動していると思え」

「なるほど」

「コバーン、あんたには感謝しとるぞ。家具や武器集めに、やりがいのある仕事。若造を育てる根性と技術。退屈せず暮らすには、十分なものを備えてもらったからな」

「改めて言われると照れるな。まあ、これからも、ひよっこ達の面倒を頼むよ」

「当然だ。ではな、創造主にして教え子よ」

「そっぴや、ルーゴアってのは、高校時代の体育教師をモデルにしたんだっけ。」

「そりや、頭が上がらないわけだ。苦手だったもん。」

とにかく、チュートリアルを終えた俺は、BLT剣士としての第一歩を踏み出した。

3

村の入口に立っていた少女が、微笑んで挨拶をしてくれた。

「ようこそ、フィリス村へ」

「やあ」

俺はにっこりと微笑み返した。

すると、彼女もさらに顔をくしゃくしゃにして笑顔を返す。

「ようこそ、いらっしやいました」

「ああ」

「ここはフィリス村です」

「う、うん」

そうか。村の入口に立っている少女なんて「挨拶がてらに地名を告げる感じのいい子」くらいのキャラクター作りしかしてなかったな。

「じゃあな」

「はい、ここはフィリス村ですからね」

素敵な笑顔はイメージ通りだったが、もう少し、キャラを練りこんでおけばよかった。

俺は、まず、村の中心にある酒場へ向かった。

この村では、酒場が役場と宿屋と道具屋を兼ねている。

冒険の用意も、旅の仲間を探すのも、飲んだくれて誰かにからむのも、ふて寝すらも、全部ひとつとこで済むって寸法だ。

【ホワイートハート酒場】と彫られた、でかい一枚板の看板の真下、両開きの木戸を押すと、人々の話声と音楽が押し寄せてきた。

小さな体育館ほどもある店内に、ゆったりと木製の丸テーブルが並び、その中央に上下階へと続くらせん階段が伸びている。突き当りには店の幅一杯にカウンターが設えられている。

俺が奥へ進むと、すれ違いざまに誰もが愛想をくれた。鋭い目つきでにらんでくるおっさんや、笑顔をくれる露出度の高いウエイトレス、声をかけてくる飲んだくれ。

無視されるよりはありがたいが、全員が威圧的に見えて仕方ない。現実世界での俺は百八十センチ以上あるから、見下ろされるのに慣れてないんだよ。

微妙におどししながら店を縦断して、カウンターのストウールに座った。

「ウイスキー、ダブル」

「はい」

見た目がガキだからって、差別はされなかった。

グラスはすぐに出てきた。味は、俺が家でよく飲む国産の安酒と同じだ。

残念ながら、これが味に関する想像力の限界ってわけか。高い酒を飲んどけばよかった。

一息ついて、店を見まわしてみた。

テーブルは半分ほど埋まっているが、出来合いのキャラクターだらけだ。

本物のプレイヤーはどこにも見あたらない。俺しかいないのか…
「あーっ！」

高くて、伸びのある女性の声、いわゆるアニメ風ボイスが店内に

響いた。

さつき、俺が通過した木戸をバタバタと揺らして、真っ赤なマン
トの女が走り込んでくる。

魔術士のみが手にできる先っぽが「？」型の杖を振り回してだ。

危ないなあ、床にテーブルにイスにガンガン当たりまくっているぞ。

髪はピンクで丸顔で、胸がボツカン、くびれがキュ、ヒップがド
ン、マントの中はへそ出しルック、声だけでなく見た目もジャパニ
ーズアニメまんまだ。

女は俺の方へ一直線に走ってきた。

「キミ、キミさ。普通の人じゃない？」

座っている俺を真下に見下ろす位置で立ち止まり、息をハアハア
と切らせている。

うん、ちよつと色っぽいかも。

「やつぱ、そうだよな。普通の人だよな。この村さあ、ともに会
話できる奴がいないのよ！ゲームしたら、いきなりこんなとこに
来ちゃって。もう三日以上、泣いたり、怒ったり、村から出て魔物
に襲われたりしてるんだから！こんな可愛い娘が助けを求めているの
に、ここの男どもはつれないったらないの。んで、気づいたの。こ
こはゲームの中の世界で、こいつら全員ゲームキャラだつて。ダメ、
使い物にならない！キミを見て、ほら初めて見る顔だから、他の連
中とは違うだろうと思って。近寄ってみたら、やつぱり、プレイヤ
ーさんみたいじゃない。つか、そうでしょ？だから、私の悩みもわ
かると思つて。だいたい、ゆっくりお酒を飲んでるくらいだから余
裕あるわけじゃん。これは頼りになる、きつと。ガキだけど。元の
世界への帰り方を知ってるはずだと気づいたの。いや、気づいたの
は今よ。さつき、見つけたばかりだもの。それでさ。帰り方知つて
るんだよね。知ってるんでしょ、いいなさいよ。隠してもわかるん
だから。もう！何、ポカーンとしてんのよ。ああ、もうじれつたい
じゃあね、じゃあ二択でいくわ。帰り方、キミは知ってるの？知ら
ないの？どっちよ？」

「あ？ああ？」

「どっちよ！知ってるの！知らないの？イエース、オア、ノー！」

「ノ、ノー……」

「あー、もー、あー、もー、あー、バカ！役立たずつ。てゆーか、よく見たら、超低レベルの装備じゃない、ゲームを始めたばかりかよ、その服。武器だって、しょぼい刀だし。私の方がまーだ経験値が高そうじゃない？ごめんね、ごめん。キミなんかに話しかけた私がバカでした。愚かでした。他を探すわ。じゃあ、また、縁があったら会いましょう。ばいばい！」

俺は目も口も開きっぱなしになった。

女は来た時と同様の猛スピードで走り去った。

混乱するのはわかるが、ちよつと度が過ぎている。

ただ、おかげで俺以外にもプレイヤーがいるってことはわかった。……ってことはだ。彼女もいるかも。今朝のチャットではHOFにいるといっていたし。うーん、でもな、こっからじゃ遠い。それに、難易度も高い。俺のレベルじゃ、まだまだ近寄れない。だが、他にあてもないし……

「よし、冒険だ」

つい、口をついて出た言葉にバーテンダーが反応した。

「はい？」

「あ、いや。えーと、チェイサーをもらえるかな」

「はい」

ウイスキーの残りと冷たい水を立て続けに飲み干して、決意に勢いがついた。

HOF、正式名称ホールオブフーム（Hole Of Fame：名声の穴）。

豪勢なアイテムと強敵が詰まっている、難易度五つ星のダンジョンだ。ゲーム世界での有名人になり、プレイヤーの殿堂入り（Hall of Fame）がしたければ、ここに潜るのが近道。

もちろん、ひよっこレベルの今の俺にとっては、今日初めてプー

ルで泳いだ子が、いきなりオリンピックを目指するようなもんだが。でも、まあ、やるしかあるまい。他に道はない。

厳しい冒険には欠かせない、頼りになる仲間を調達するため、俺はらせん階段に向かった。

酒場の地下には、冒険に出るプレイヤーに便宜を図るための施設が並んでいる。

銀行、倉庫、ビーンズを扱う薬局に、武器と防具の店、そして俺が目指す傭兵あっせん所だ。

「いらっしやいませ」

八頭身でショートカットの清楚な美女が出迎えてくれた。

この子は小津君の好みだった。あいつ、今頃どうしているやら。

「こちらのご利用は初めてですか？」

「いや、別アカウントで使ったことがある。その時にお願いした傭兵を呼びたいんだ」

「かしこまりました。では、こちらにお客様のお名前と傭兵の名前、それから合言葉をご記入ください」

傭兵あっせん所は、コンピュータキャラクターを仲間に冒険するための仕様だ。

まず、いくらかのお金を払って傭兵を作る。こいつは戦闘をするたびに、プレイヤーキャラクターと同様に成長し、強くなっていく。また、キャラクター名と合言葉を知っているプレイヤーなら、誰もがこの傭兵を雇える。

それぞれが育てた自慢のキャラクターを貸し借りしたり、数人で一人の傭兵を育てたり、ガンガン育ててくれと合言葉をネットで公表したり、このシステムを利用している者は多い。

それなりにヒットしたシステムだ。しかし、この仕様、作っておいてよかった。こんな状況で使う日が来るとは、思いもしなかったが。

俺は申請書に必要な情報を書き込んだ。

■ 依頼主：コバーン

■ 傭兵：ピリントン

● 合言葉：KAWA111

このピリントンは、稼働中の環境に残した、唯一の開発者用プロタイプ傭兵だ。

他の傭兵と違い、レベルの概念がなく、組んだプレイヤーの力に応じた性能になる。

要するに、相棒として最高の相性とバランスになるコンピュータキャラクターだ。

「ご記入内容はすべて確認いたしました。傭兵には連絡をいたしました。明日の朝には酒場へ到着する予定です。ご利用ありがとうございます。ございました」

俺はもう一杯ひっかけてから、酒場を出た。

西の空が赤く染まっていた。

酔い覚ましに少し歩きなくなったので、村の奥にある丘へ向かった。

空は赤さから、だいたい夜六時だとわかる。

このあかね空は、これから二十分毎に四段階で暗くなっていく。そういうシステムになっている。

ここでは、朝も夜もデジタルに訪れる。

物思いにふけるための材料はいくらでもあったが、疲れが勝ったのだろう。

膝を抱えて座ったまま、目を閉じてしまった。

まぶたを開けた時には、すっかり夜。空には無数の星が輝いていた。

見た目重視の春夏秋冬を無視した星座群を見やりながら、酒場へ戻った。

もう一杯だけ飲んで寝ちまおう。

まぶしさと暖かさで目覚めてしまった。

夜明けと同時に寝ることはあっても、起きることなど滅多になかったのに。

部屋の窓にカーテンがなく、太陽が昇ると日差しが顔を直撃してくるせいだ。

俺は欠伸を一つして、目を開けた。

ベッドに仰向けになったまま、両腕を直角に上げて伸びをする。

見慣れない天井の下、シワ一つない小さな手が見える。軽くグーパーしてみる。

目が覚めても夢じゃありませんでした、ということか。

そうとなったら、腹を決めよう。

今日中に村を立て次を目指そう。愛しの女武道家ユーリカに会うために。

身支度をととのえて、階下へと降りてみた。

朝の酒場はさすがに閑散としている。朝飯の客がぼつぼつといるだけだ。

そんな中、一際目立つ客が二組いた。

一つは大声で騒いでいる冒険者三人組、おそらく明け方に戦闘から戻って来たのだろう。テーブルには大量の空きグラスと食器が重ねられている。

もう一つは、ブロンドの長髪が美しい、がっちりとした体格の剣士だ。

こちらは背筋をすっと伸ばし、ロンググラスに注がれた琥珀色の液体を口に出している。

俺は剣士の方へ近づいていった。

「ビリントン！」

名前を呼ぶと剣士は立ち上がって、右手を差し出してきた。

「おひさ！ っかし、こりゃまた、可愛くなっちまったなあ」

俺の姿に驚いたようだった。

逆に俺から見た彼は、モニター越しより、かなりガッチリ系に見える。

「近くだと、思ってたよりでかく見えるな」

「いや、本当にでかくなっただよ。この前のアップデートでさ。

デザイナーがさくつとやってくれた。顔つきも少し変わったろ？結構、気に入ってるんだ」

そういわれてみると、鼻が少し高く、髪が長く、あごががっしりとしたようだ。眠たそうなほど細くクールな瞳と、皮肉げに口元をゆがめる笑みは前のままだが。

挨拶もそこそこに、テーブルに向かい合って座った。

ウエイトレスが来たので、彼と同じ物を注文。色からしてブランデーティーだろう。

「なんで、そんな姿してるんだか。少年好きなお姉様でも引っかけようって魂胆か？」

凄みのある顔と体格で、軽口を連発する傭兵へ、俺はこれまでの経緯を説明した。

「色々と災難だったなあ。でも、これからは剣と魔法と戦いの日々が日常だ。こうなった以上、早く慣れちまった方が楽だぜ。それに、こっちに愛しの君がいるかも知れないんだろ。女のために馬鹿をするのは男の基本。冒険の旅路、どこまでも付き合っぜ」

そういつて、グラスを掲げてくれた。

俺もグラスを手にした……うわっ、朝からキツイの飲んでやがるなあ。ブランデーティーというより、香り付けに紅茶を垂らしたブランデーじゃないか。

アルコールに負けてむせていると、後ろから聞き覚えのある声が響いてきた。

振り向くと、あの騒々しい女魔術士と、酒盛り中の冒険者三人組が口論になっている。

あの手の連中にあの調子でつかかかっていけば、揉めるに決まっている。

酒が入ったむさい男に、露出度が高い女性つてのは、悪い意味で相性良すぎなんだから。

あきれて見ていると、最も大きな男が立ち上がった。拳をあげた。
「うきやあああ！」

甲高い女の悲鳴に続いて、イスと机がガラガラガツシャンという音を奏でた

ビリントンが、一気に間合いを詰めて筋肉男をぶっ飛ばしたのだ。さらに、背後で立ち上がったもう一人に振り向きざまに頭突きを喰らわし、剣を手にかかってきた三人目を跳びヒザ蹴りからの払い腰で床に叩きつけた。

「きやあああ！」

歡喜の悲鳴を上げて、女がビリントンに抱きつく。

ああ、もう、何が起こつてもうるさい奴だな。

それにしてもビリントンの動きは見事だった。人気も凄い。ギャラリーからは拍手喝采、魔術士が抱きついた時には女性陣からブーイングまで起こつていた。

俺が、キャラクター設定書に書いた通りだ。

♪見た目はクールな英国紳士、口を開けば軽口ばかり、

素手のケンカじゃプロレスラー並み、剣を持ったら騎士団長並み、酒と女にゃ目はないが、主人と認めた相手には

命がけで忠誠尽くす。それが傭兵ビリントン♪

…と冒険者の間で歌われる、誰もが憧れる男の中の男

まあ、そういうキャラクターだ。

人気者が席へと戻ってきた。余計なことに女魔術士を連れている。それにしてもこの女、なんでニヤニヤしているんだろう。

ビリントンが何かお世辞をいったのか。いったんだろうな、きっと。

「コバーン。彼女も一緒に冒険することになったぜ。よろしく」

「ちよつ。何、勝手に決めてるんだよ。ちよ、ちよつとこつち来い」
俺は今にも突っかかってきそうなマント女を手で制して、ビリントンにささやいた。

「あんな、うるさくて、低レベルな奴。なんで誘うんだよ？」

「理由なんて単純さ。俺もあんたも剣士じゃないか。魔術士なしで冒険なんざ、素手で銀行強盗するより無茶だぜ」

「魔術士が必要なら、あんたみたいな傭兵を雇えばいいだろう？」

「忘れたのか？俺以外の傭兵は、能力に限界があるんだぜ。傭兵魔術士なんざ、覚える術は基本の数種類のみ、使える回数も少ない。そんな奴、中盤以降は魔物の餌もいいとこだ」

「うーん」

「魔術士で、プレイヤーで、女で、露出度が高い。それだけでも合格ってことにしとけ。ざつと酒場を見渡しても口説けそうな魔術士は他にいないだろ？」

ビリントンのいう通りだ。プレイヤー自体をほとんど見かけないし、この世界に新たなプレイヤーが入ってくる保証はどこにもないのだから。

「わかった。お前の勝ちだ」

「よし」

ビリントンは彼女を同じテーブルにつかせて、お互いを紹介してくれた。

「こちらはコバーン、このパーティのリーダーだ。訳あって初心者のふりをしてるが、実は超ベテランの冒険者」

紹介がおおざっぱなのはいいが、意味不明すぎ。彼女、げげんな顔をしているだろうが。

「コバーン、こちらはジェシカちゃん。ご覧の通り、ルージュとマントの色をコーディネート、杖の magari 具合まで可憐な魔術士のレディー」

あーもー。見た目のことしかいってないし。

「じゃ、三人の出会いを祝してカンパイー！……つつても、彼女、飲

み物がないか。おい、ウエイトレスさん！注文と、あと女性が足りないから座ってー」

おい、合コンかよ…

結局、午後までたっぷり飲んだ俺たちは、もう一晩宿を取った。

床とベッドの上を冒険用アイテムが占拠していた。

剣や杖、鎧や衣服といった大物から、色も形もとりのビーンズや、指輪、ネックレスなどの小物まで、種類別にきちんと並べられている。

ここは村の宿、ビリントンの部屋だ。

置かれているアイテムも、ほとんどがビリントンの物。少しは俺やジェシカの分も混ざっているが、しょせん低レベルのひよっこキヤクター、かばんの中はスッカラカンだ。冒険の序盤は経験豊かな傭兵の持ち物に頼らざるを得ない。

「旅に出る前や、冒険が一段落ついた時には、必ずアイテムを整理しないと。誰がどれを持つか。どれを金に換えるか。使い道が謎な物はないか。常にチェックしておかないと命取りになっちゃう」

ビリントンがいうと説得力が違う。ジェシカも黙って聞いている、昨夜の酒が残って眠いだけかも知れないが、つか、その可能性は大きい。

しかし、さすが、歴戦の強者だ。

消耗品にしろ、アクセサリにしろ、かなりの量と種類が揃っている。

「まずはビーンズを分けよう。体力回復や状態変化解除、魔力耐性向上、ここらの基本的な物は等分でいいよな。使い道が微妙な奴はどうしようか」

「どんなものがあるんだ？」

「属性強化、巨大化、透明化、魔物化、移動速度向上、跳躍力向上、爆竹、その他もろもろ」

「ジェシカでいいだろう。俺たち剣士は前衛で剣を振るい、後衛の魔術士が必要に応じてアイテムを使うのが、オーソドックスな形だ」
「了解。ジェシカ、それでいいな」

「んー、他のはなんとなくわかるけどー、爆竹って？」

半眼が寝ぼけ声で訊ねた。あの単語の並びで、気になるのはそれかよ？

「パンパンパーン！と大音響を出して、辺り一帯の魔物を呼び寄せるビーンズだ」

「うげー、私、それ持ちたくない。間違って鳴っちゃったら」

「うん、やばいことになる。もう、魔物の皆様に大人気！行列ができる魔術士だ」

「それコバーンが持つてよ。他は私が持つてくわ。面白そうだし」

「面白半分に使うなよ。さてと、次は野営用のテントと携帯食料、これも等分でいいか。武器と防具、衣服の類はどうしたものか」

武器には、かなりのレア物もあったが、残念ながら、低レベルな俺とジェシカじゃ、どれも装備がかなわないものばかり。

「ビリントンさえよければ、すぐ身に付けられる物以外は酒場の倉庫に預けなよ」

「その必要はないさ。俺は他の連中とは所持品制限が違うからね。知ってるだろう」

ああ、そうか。こいつは特別だった。

「次はアクセサリだ。火炎属性魔法の攻撃力向上ネックレス、雷属性魔法の耐性向上イヤリング、この辺りはジェシカが持てばいい。どっちも宝珠がキレイだろ」

ビリントンがアイテムを投げると、ジェシカはすぐにキャッチして身に付けた。

「首に真つ赤な炎、左耳に金色の稲妻。似合ってるね。セクシーかつキュート」

すぎがあれば、軽口を入れてくる。こういうところも特別だった。

おーおー、ジェシカ、にんまりしているよ。

「コバーン、物理攻撃の回避力向上イヤリング、的中率向上リングはあんたがはめるといい」

「お、あながと」

ビリントンは、残りのアイテムを無造作にポイポイと、腰に付けた圧縮ポーチへ放り込んだ。

五センチ四方の小さな袋に、あらゆる物が吸い込まれるように収まっていく。ポーチには大小を問わず、通常は三十個までのアイテムが入る。それが持ち運べる物の制限量ってわけだ。ちなみに開発者専用傭兵のビリントンは、二百五十五個まで所持できる。

「よし、出ようか」

俺たちは酒場へ行き、酔い覚ましのお冷やを注文、三人で乾杯した。

外へ出た。でかい太陽がまぶしかった。

この世界の太陽は、見た目、現実の倍以上ある。俺の趣味だ。

「いい天気！絶好の旅立ち日和ね」

ジェシカはそういったが、ここでは演出上の必要がある場所以外、いつも晴れた。

とにかく、そんなありきたりな、あり得ないほどの晴れの日に、俺たちの冒険は始まった。

4

フィリス村辺りに、たいした魔物は出ない。

いきなり難易度が高いと、始めたばかりのプレイヤーが逃げてしまっただ。

ビギナーにリピーターへと育ってもらうには、まず、力押しでも勝てる敵を出し、自信を付けさせる。それがゲームバランスの常識だ。一般のプレイヤーは知るよしもないが。

ジェシカはまったくのビギナー。

この世界で生き抜くために、自信を付けるべき段階にいる。

フィールドでの彼女は、村の中での勢いはどこへやら、おっかなびっくり歩いている。

微笑ましいというか、おどおどとした姿には、非常に好感が持てる。

「ぎゃあ！で、でででっ！」

大声をあげつつ、ジェシカが真後ろへ跳ね飛ぶのと、ほぼ同時に地面が盛り上がり、むくむくと巨大なミミズ状の生物が出現した。鎌首をもたげて、大きな口を開けている、

高さ二メートルの濡れ光る肌色の極太パイプ、モールスネークという魔物だ。

「キシヤー！」

空間を呼気でこするような音を出して、威嚇している。

こいつ、見た目は不気味だが攻略は簡単。首を伸ばしたところを狙って、叩き斬ればいい。

正直、ちよろい。

俺は、真正面から突っ込んでいき、敵が首を伸ばすのに合わせて、身体を横に開いた。

刀を上段から振り下ろす！

「ギシュアアー！」

「うぐあ？」

硬すぎる？

刀が跳ね返された。

モールスネークは首を大きく振った。

俺の腹に頭が当たった。Cの字型の体勢で弾き飛ばされた。

「キシヤー！」

尻餅をついて、呆然と魔物を見る。自分が初心者のパワーと技術であることを噛みしめる。

すると、真上から、さらなる擦過音が聞こえた。

もう一匹出現したのだ！

俺の顔面をめがけて、首を振り下ろしてくる。

鋭い歯が生えた真つ赤な口が開く。サメのように整然とした歯並び。恐ろしくも美しい。

「どけ！」

凄まじい衝撃だった。固く大きな物がぶつかってきた。

今日は俺、よく吹っ飛ぶ日だ。

首を起こすと、さっきまで俺がいた場所にビリントンが仁王立ち、魔物を斬り裂いていた。

「コバーン、大丈夫かよ」

「ああ…」

俺は尻をはたきながら、立ち上がった。

正面にいるジェシカが叫ぶ。

「動かないで！」

「は？」

「バーナ！」

顔の左半分を熱風が吹きすぎていった。

立ち尽くす俺の斜め後ろで何が倒れる音がした。

振り向くと、顔が焼け焦げたモールスネックがのびている。

「決まったよ、ビリントン！」

ジェシカが満面の笑みでバンザイ。バーナ…って初級の火炎魔法だよな。

「あちっ」

気づくと同時に熱さを感じた。顔が燃えた？

「ジェシカ！あちーよ！」

顔面を押さえてうずくまる俺を、ビリントンが叱咤する。

「わめくな。んなもん、かすり傷だ。自分で直せるだろ？」

そうか。俺はあわててビーンズを取り出そうとした。

「もったいないだろ。ビーンズはとっとけ。ヒリンだよ、ヒ、リ、ン！回復魔法！」

「ヒリン…か。えーと、で、ど、どうすりゃいいんだ？」

「ああ、もう。んーとき。回復したいところに手を当てるなりして、

意識を持つてく。そこで、魔法名を唱えるんだよ。ルーゴアに習つたろ？」

いわれた通りにすると、手から光が溢れてきて、すぐに痛みが消えた。

「素人かよ。それに比べてジェシカちゃん。教えたとおり、グツジヨブ！」

二人して、親指立ててニツコリ、片手を合わせてハイファイブ。俺はさあ、いままでキーボードでしか操作したことがないんだぜ、教えてもらったばかりのこと、とっさにはできないって。しょうがないじゃん。

「コバーン」

これ見よがしにすねて、しゃがんでいると、ピリントンが手を差し伸べてきた。

剣士らしい分厚い手を握り、しぶしぶ立ち上がると、耳元に顔を寄せてきた。

ふと、目の前をよぎる金髪と青い瞳が美しいと思ってしまい、そんな自分が嫌になる。

「あの娘を育てるためだ。我慢してくれ。あんたは、身体さえ慣れれば大丈夫だ」

ああ、わかっていたよ。くそつ。

なんか、もう、ホッペが真っ赤になっちまう。

しかし、頭でわかって、口で納得した風なことをいっても、気持ちを追いつかない。。

足手まといな自分にやきもきする。ジェシカはますます俺を舐めてかかる。

腹が立つ。とはいえ、今の俺は、外見も態度も戦闘力もガキそのもの。

だから、そういうふてくされた様子がよく似合つみたいなんだ。これが…

それにも腹が立つ、もう。

初日だけで戦闘回数は十回を越えた。

俺とジェシカも、少しは魔物を倒したり、斬ったりしたが、ほぼブリントンの手柄だ。

ただ、魔法の使い方や体の動かし方は徐々に感覚がわかってきたし、一日で、なんとか足手まといは卒業できたんじゃないだろうか。

オレンジ色の夕日を見ながら、ブリントンがいった。

「暗くなる前に、テントを張ろう」

そして、ポーチから、折り畳まれた巨大な布と金具を取り出した。さながら、猫型ロボットが腹の小さなポケットからどんなサイズの物でも取り出す、あのコミックのようだ…というか、それを真似て考えた仕様なんだけどさ。

「ジェシカはそっち、コバーンはあっちの端をぐーっと引っ張って、クサビで固定してくれ。模様のある方を上に向けてくれよ」

クサビの頭には、八角形に星と渦巻きを重ねたような模様が刻まれている。

ジェシカがコンコンと木づちでクサビを叩きながら、訊ねる。

「これ、何のマークなの？」

ブリントンも木づちを振りながら答える。

「そいつは結界の紋章だ」

「結界？」

「場所にバリアーを張るとでもいうかな。結界で囲った場所には魔物が入って来られない。四隅に結界紋章の付いたクサビを打ち込めば、その中の空間は…どうなる？」

「んー、安全ってこと？」

「そう、それがテントの仕組みだ。ただ、クサビに込められた力が薄れれば結界は弱まる。テントなら、一晩しか持たない」

「時間制限付きのオートロックなわけね。ところで、三人一緒に寝るの？」

「ああ」

「あのさ。私、女の子なんだけど」

「女の子も男の子も、ひとつテントの下で寝るのが冒険者のしきたりだ」

「ええ」

「ぶうたれるな。寝てる間にクサビが抜けて、魔物が来たらどうする？泥棒や強盗が来たら？人間には結界は通用しないぞ」

「あ」

「お互いの背中を預けるのがパーティ。冒険仲間だ」

「じゃ、じゃあ。ビリントンが真ん中に寝て。私、子どもはちょっと！」

まる聞こえなんだけど。嫌われているなあ。心が折れそう。

朝から魔物を倒しながら移動し、夕暮れには寝る。そんな激しくも単調な日々が続いた。

俺とジェシカは腕が上がるにつれて、お互いを認められるようになってきた。

四六時中、命がけで共闘していれば、心を許せるようになるのも当然か。

彼女の物言いのきつさは相変わらずだが、そうだな、口の悪い兄妹みたいなものか。

もちろん、俺が兄だ。彼女は自分が姉というだろうが。

そんなある日、ジェシカが死んだ。

RAT!

5

その日、俺たちは急いでいた。

明日には次の村に着くという地点で、テントは残り三つ。悪いペー
ースじゃない。

フィリス村を出て以来のベッドにありつけるということで、気
はやっていたのか。

特にジェシカは朝から、魔力回復のビーンズを乱用して攻撃魔法
を連発していた。

村に着けば補給ができる、使い切ってしまったえ、と思っていたのか
な。

ルーセントホースという魔物がいる。

鋭い牙を持った人喰い馬だ。こいつらは、邪悪な雰囲気満々の赤
黒まだらの模様で全身が彩られている。しかし、止まっている時に
しか姿が見えない。しかも、群れで行動する。

冒険者が知らず知らずに囲まれて、気づけば手遅れ、ということ
もよくある。

そして、足音が大きい。気づきやすい反面、姿が見えないので、
恐怖感はいや増す。

旅先へと急ぐ俺たちの前に、そのルーセントホースの幼獣が現れ
た。

走っては逃げ、走っては逃げ、だるまさんが転んだ状態で、誘う
ように前を飛び跳ねていた。

ジェシカはバーナを撃ちながら追いかけていく。

俺とビリントンが見ている中、突然、彼女が宙に浮いた。

まるで、バレーボールでパスが回されるように、彼女の身体が数回宙を舞った。

知らず知らずのうちに、走ってきたルーセントホースの群れに突っ込んだのだ。

「ジェシカ！」

ビリントンの叫び声が、津波のように押し寄せるルーセントホースの足音でかき消された。

俺たちは後退りながら、剣をふるった。

ジェシカの方を見やると、右腕を天に差し上げた状態で、下半身を地面にこすりつけながら、移動している。透明な馬に手首を噛まれて、ずるずると引きずられていたのだ。

悲鳴は徐々に小さくなっていった。

群がる魔物を何匹か倒し、何匹かを手負いにして、なんとか走り逃げた。

だが、その頃には彼女の姿は完全に見えなくなっていた。

「巢に運ばれたか」

ビリントンが、彼女の消えた方向を見ながらいった。

「場所はわかってるが…きついなあ」

「正面突破は」

「できるわけないだろ。俺たちは剣士、接近戦の専門家だ。洞窟の中に、牧場を開けるくらい人喰い馬がいるんだぜ。下手に突っ込めば、二次遭難発生さ」

かといって、ジェシカを見捨てるわけにはいかない。

俺は手持ちのアイテムで、できる戦法をひねり出した。それは、玉砕よりはまし、という程度のものに過ぎなかったが、ビリントンも首を縦にふってくれた。

「それ以外はなさそうだな。時間が経ちすぎるとまずい。まだ、手遅れでないことを祈ろう」

「手遅れ？」

「リカバリンの効き目だよ」

ビリントンは復活薬の名をあげた。死んだプレイヤーを蘇生できるアイテムだ。

こいつの効き目は、身体がどれだけ残っているかで変わってくる。半分も喰われていれば、復活の確率も半分以下だ。

「あのさ、ビリントン。ゲームキヤラクターにこんなことをいうのはなんだが。なにかこう、ルール破りな方法はないのか？リセット操作というか。データ巻き戻しの…」

歴戦の傭兵は、苦々しげな笑顔をみせ、溜息を一つついてから、返事をくれた。

「なあ、コバーン。これまでソロプレイで死んだ時はどうしていた？」

「そりゃ、いったんログアウトして、村から再スタートしていたな。稼いだ金と経験値はパーになったけど」

「うむ。俺には経験はないが、その時、コバーンの本体は、この世界の外にいたんだろう？」

「ああ、そうだ。モニターを見ていた」

「そう、モニターというんだよな。その中で生きたり死んだりしてたわけだ。なあ、いま視界の上下左右にボタンが見えるか？そのボタンを押す矢印はあるか？」

「いや、ない」

「そういうことだ。今は体がなくなったら、この世界から消えるんだよ。その先がどうなるかはわからん。ここで死んだら、モニターの前にいるのかも知れない。悪い夢でしただってオチなのかも知れない。でも、今はこの世界に外はないと思ってくれ。ここでどう生き延びるかを考えるんだ。それ以外は現実逃避だ」

「……………」

「とにかく、作戦は一か八かだが、勝ち目はある。やろつ。ジェシカを救おう」

相手は百戦錬磨の傭兵剣士、俺は駆け出しの冒険少年。

シチュエーションだけで見れば、怖じ気づいている若者をベテランが諭しているって感じた。ありがちな場面だが、まさか自分が作ったキャラクターに、人生を諭されてしまうとは。

そして、俺たちは作戦にとりかかった。

ルーセントホースの巢は、村や町を結ぶメインルートから離れた、岩壁の洞窟だ。

ここに辿り着くまで、何度か魔物と出くわしたが、奴らは一頭もいなかった。

見えなかったただけかも知れないが、巢に大群が潜んでいる可能性は高い。

ぐずぐずしているヒマはない。作戦の準備に取りかかる。

洞窟の入口は十メートル、その両脇にテントを張り、右にピリントン、左に俺が身を潜めた。

すぐにテントから右手が突き出される。

指が折られる。カウントダウンだ。五、四、三、二……ためて……
ー！

「しゃー」

俺は叫びながら、テントを飛び出した。

洞窟内に走り込む。爆竹ビーンズを床へ叩きつけ、出口へダッシュ。
ユ。

後ろで轟音が響く。

何十頭、付いてきたことやら。

刀を振りながら、死に物狂いで走り、出てきたテントへ戻った。多少は噛まれている、ヒリンを唱えて一息つく。

周囲からはガツガツという馬の足音と鼻息が止まない。

「おりゃあ」

しばらくして、ピリントンの気合いが聞こえた。

洞窟の正面に張ってある、第三のテントへ駆け出したのだ。洞窟両脇のテントとは、正三角形を描く配置になっている。

俺のテントを囲んでいた人喰い馬が一気に離れていく。

足音が完全に離れきるのを待つ……十秒経過。

テントの小窓から覗くと、洞窟正面のテントを囲む赤黒まだらな姿が見え隠れする。

それ以外は草原が広がるのみ、視界良好だ。

ビリントンは無事に第三テントへ辿り着いたのだらう。

俺は、息をひとつ呑み込んでから、ふたたび、巣に飛び込んだ。

洞窟の中は無音だ。

ルーセントホースは一頭もない。すべて出払ったらしい。

松明を灯す。大きめの児童公園くらいの広さだ。

ほのかな明かりの中、ジェシカが浮かび上がった。生気がない。かなり傷ついている。

抱きかかえて走り、入口のテントへと転がり込む。

仰向けに寝かせる、目を覆いたくなる姿だ。

肌にも、傷口にもまったく血の気が感じられない。衣服がボロボロなだけでなく、手首や二の腕、肩や脇腹、太もも、足首、とにかく全身いたるところが、折れたり潰れたりしている。

ルーセントホースの歯形なのだらう、半月型にへこんでいるところもあった。

へこんだところには真っ赤な光の粒がついている。おそろおそろ傷口に触れると、光の粒はパツと飛び散る。パーティクル・エフェクト、3Dゲームでは一般的な演出効果だ。

「よし」

俺は気合いを入れてから、ポーチに手をつ突っ込み、リカバリンの瓶を取り出した。

まず半分を彼女の身体にまんべんなく振りかける。半分を特にひどい傷に擦りつける。

ピチャピチャと滴が散った。後は待つだけだ。運があれば、きっと生き返ってくれる。

すぐに変化が現れた。

傷が治り始めたのだ。光の粒が飛び散り、欠けていた部位は青白く光って元の形を示す。

次に半透明になり、やがて完全な形に戻っていく。

表情がかすかに動き、大きな目がゆっくりと開き始めた。

「ジェシカ！」

「あ…あ」

「大丈夫か？」

「あ、あ…コバーン？」

かすれた、まったく力のこもっていない声だった。

リカバリンで復活した時の体力はほぼゼロに近い。俺は彼女の口にビーンズを二個放り込んだ。一つは体力回復、もう一つは魔力回復だ。

すぐに効き目があった。

マントが破れて、一段と露出度の高まった美女は、いきなり俺を抱きしめてきた。

擬音でいうなら、ガバアツという感じで。

「コバアアアン！うわ〜ん！え〜ん！」

「ちょ、ちょ、おま」

巨大な胸が口をふさぐ。

その上、後ろに回された腕のせいで首が反っているから、息苦しくてたまらない。

「ひい〜ん、ぐすぐす…ふひい〜、ふひいひい、ふえ〜ん！怖かったよ〜！」

俺はあごを上げて気道を確保してから、彼女の背中に手を回し、ポンポンと叩いた。

「あのね、ぐすつ、ぐずん…食べられた〜、あいつら、私を食べたの〜」

生き返った直後だが、ビーンズのおかげで体力は満タンなわけで、泣き叫ぶ音量も、しがみつく強さも半端ではない。

俺はしょせん子どもの体格。

両肩をつかんで引き離そうとした体勢のまま、押し倒されてしまった。

「草原で、ぼんぼん跳ねられた時に全身が痛くて…ひ、ひっ…そのまま気が遠くなつて。気が付いたら真っ暗闇だったの。指一本動かせない、声も出せない…だけど、だけど！齧られる痛みだけはあつて…痛くて気を失つて、痛くて目が覚めて…その繰り返しで…ああ…」

涙を流しながら、ずっとしゃべり続けている。

「そのうち、痛みがなくなつて。やっと…やっと死ねると思ったら、意識はそのまま。でも齧られたり、上に乗られる感覚だけはあつて。でね、見えるの、目を閉じていても。どんどん自分が壊れていくのが。食べられていくのが…私このまま、肉片になっちゃうのかつて。それでも意識があるのかつて。恐かつたの…！ふえ〜ん」

ジェシカは、俺の腹に馬乗りになっている。

彼女が垂れ流す涙とよだれで、こっちの顔はびちよびちよだ。

「ふえ〜ん…？あ、あれ。彼は？ねえ、コバーン、ピリントンは…どこ？」

「む、向こうのテントにいる。ちよつと、説明するから、横にどいてくれ」

手で涙をぬぐいながら、横にずれてくれた。

俺も手で、顔についた彼女の涙とよだれをぬぐいながら、座り直した。

そして、今回の作戦について説明をした。

「じゃあ、ピリントンのテントは、あの馬に囲まれてるのね」

「そう。俺たちの助けを待っている」

「でも、あの洞窟の魔物が全部いるんでしょ？」

「だから、作戦が必要なのだ。三つのテントで、三人それぞれが順番に囲になって敵を引きつける。別のテントを囲んだ敵を後ろから攻撃していくんだ」

「ちょっと！罔なんか嫌よ！できたてはやはやのトラウマがあるんだから！少し考えてよ」

「落ち着けよ。ジェシカはそんなに危険じゃないから。遠距離からポンポンと攻撃魔法を撃って、すぐにテントへ引っ詰めばいいんだ。テントから一歩だけ出て、撃ちまくる。魔力が切れたら中に入ってビーンズで回復。これを繰り返すだけでいい」

「う、うん」

「俺とビリントンは、お互いのテントを行き来して、後ろを向いた敵に斬りかかっていく。命のやりとりはこっちにまかせる。そっちは、敵の気をそらせるつもりで攻撃すればいい」

「…うん」

「頼んだよ。それから、ビーンズをいくつかくれないか。いざという時のために」

彼女に手持ちを見せてもらい、透明化と魔物変身のビーンズをもらった。

そして、俺は刀を振り回しながら、ビリントンのテントへと走った。

「やあああああ！」

手ごたえがあった。何もない空間に赤い光の粒が散った。

同じ場所へ向けて、さらに刀を横に走らせると、赤黒い馬が姿を見せた。どうつと倒れた。

斜め後ろに方向転換し、さらに走る。

怒濤のような馬の足音を引き連れて、無人のテントへ向かう。

「うりやああっ！」

俺がテントへ転がり込むのと同時に、遠くでビリントンの気合いが聞こえた。

俺と同じことをしているのだろう。今度は馬の足音が遠ざかっていく。

別の方向からは、連続する発火音が耳に届いた。

ボツ、ボツ、ボツ、ボツ、ボツ、ボツ、ボツ、ボツ、

ジェシカの放つバーナの音だ。八連発か。魔力が尽きるまで打ちまくっているな。

次に聞こえたのは、馬の断末魔の声と倒れる地響きだった。

よし、次は俺の番だ。

こうして、三角形の陣に誘い込んだルーセントホースを、替わりばんこに攻撃し、チクチクと少しずつ体力を削り、倒していった。深追いしすぎて、囲まれたりもしたが、ビーンズで透明になったり、魔物のふりをしてやり過ごし、空が夕日に染まる頃には一頭残らず倒し終えた。

「みんな、ごくろうさん。目ばしいものを拾って終わりにしようぜ」
テントから出てきたビリントンが大声でいった。

地面にはルーセントホースからの戦利品が散らばっていた。武器や防具、ビーンズや薬など、それぞれのポーチに限界まで詰め込む。「コバーン、こいつは何だ？」

ビリントンが青く輝く二十センチくらいの箱を拾い上げた。

「見たことないなあ…」

「あんたの知らないアイテムがあるのかよ」

「いや、そんなのあるわけない。全てのアイテムは、デザインもパラメータも、俺がチェックしてる。でも、実際にこいつは…」

「そっいうの、こっちにもあるよ」

青い箱を手に首をひねっている、今度はジェシカが、オレンジ色の箱を差し出してくれた。

「何かわからないけど、キレイじゃない、高く売れるかもよ」

「わけのわからん荷物は増やしたくないがなあ」

ビリントンは持っていこうか悩んでいる。

「あつ、どろぼー！」

ジェシカが大声を上げて、ビリントンの肩越しに指を差した。夕暮れの薄暗い光に照らされて、ごそごそと小さな影が動いている。

耳がでかく、逆光で黒く見えるため、まるでアメリカ産の、アニ

メに出てくる世界的に有名な二足歩行のネズミに見える。

一応、ゲーム開発者として、あんなものが作品に出ていたら訴えられるとびびった。そういう問題はどうでもいい状況だが。

二足歩行のネズミは、ジェシカの声に反応して、すばしこく逃げ去り、あつという間に見えなくなってしまうた。

あんなキャラクターいたっけか？

魔物で出した覚えはないし、コスチュームでも、あんなシルエットの物はなかったはず。デザイナーに内緒で入れられたか？さっきの謎の箱といい、気味悪いなあ。

「ひとまず、得体の知れないものは置いていこう。夜になったら、この辺りは魔物のパラダイスだ。今日はもう、テントにこもろうぜ」俺たちはより巢から離れた場所にテントを張り直した。魔物は夜半には復活してしまう。

今日の戦闘はとんだ寄り道だったが、体力、腕力、魔力など、俺もジェシカもかなり戦力が上がったはずだ。

明日からの戦いは楽になるだろうし、すぐに次の村へ入れるだろう。

6

クラブ村に着いたのは夕暮れ時だった。

村中に「土曜開催！あと四日！」と書き殴られたバトル大会のポスターが貼ってある。

つまり、今日は火曜ってことか。

クラブ村といえば、バトル大会。BLTの世界でもっとも集客力のあるイベントだ。

毎週土曜、午後から夜にかけて、村中央の巨大コロシアムで開催。参加資格は自由。

プレイヤーVS魔物はもちろん、プレイヤー同士の戦いも一対一

からチーム戦、バトルロイヤルまで、あらゆる形式で行われている。勝てば、賞品がとつさり。腕に自信があれば、出場しないという手はない。

「人が多いわね」

物珍しそうなジェシカを、ピリントンが案内してやっている。

「バトルの村だからな。剣士、武道家、魔術士、僧侶、忍者…あらゆる職業の腕自慢がわんさかいる。職業ごとの道場も揃ってるから、修行にはもってこいだ」

「それで強そうな人が多いのね」

彼女のいうとおり、ゲーム前半には不釣り合いなほど、豪華な装備をしたプレイヤーが多い。

駆け出しに毛が生えたような俺など、すれ違いざまに舐められているように思える。

しばらく、歩いていると、異様にでかいカップルがこちらへ近づいてきた。

二人とも二メートル超級、ツルツル頭に太い眉で髭モジャのおっさん魔術士と、筋肉質の超体育会系お姉様だ。おっさんは上下をひっくり返しても通用しそうな顔で笑いかけてきた。

「ピリントン！来てたんかー」

「ひさしぶりだな。バカデカ夫婦」

我らが傭兵もにこやかに応じている。

「相変わらずだなー。ここには誰かのお供かい？」

「ああ、その若いのだ」

「へ？この子」

筋肉お姉様が俺を見下ろして、げんな顔をしている。

「あなた、レベル十くらい…よね？」

「十二だ」

「いつも、手練れとしか組まないだろー。どういう風の吹き回しだー？」

「ああ、実はわけありなんだよ。このお坊ちやまは去る王様のご落胤でな。諸国武者修行の旅に出てるのさ。俺は王様から内々に依頼を請けたってわけ。お坊ちやまを一人前に育てて、お国へ返せば、ご褒美がガバガバもらえるって寸法だ」

「へー、いい仕事にありついたわね」

「坊主。このビリントンって奴は、誰もが雇えるって男じゃない。この世界でも名の知れた腕利きプレイヤーにしか付いていかないんだ。親父さんに感謝して、立派に鍛えてもらえよ」

髭モジャが俺の頭をグリグリとなでた。

「じゃあ、またな」

バカデカ夫婦が去っていった。

「ねえ、コバーン。あなた、王子様だったの？」

「なんで、ジエシカまで信じているんだか。」

にぶい魔術士ヘツツコミを入れるついでに、振り向いてビリントンへ文句をいった。

「なんでやねん！アード、おい、でまかせもいい加減にしろよ」

「悪い悪い。あいつら、すぐ信じ込むから、面白くてさ。ま、許せ。とりあえず、酒場に入ろう。休みたい」

「おこれよ」

村の奥にある酒場へ入った。とにかく、やたらと広く、にぎやかな店だ。

なにより、プレイヤーらしきキャラクターが多く、店全体が活気に溢れている。

広く間隔を取った丸テーブルの間を店員たちが踊るように行き来している。大笑いをしながら乾杯をするパーティやら、泣きながらテーブルを回ってからみまくる女やら、抱き合う筋骨隆々の男二人組やら、十人十色、悲喜こもごも。退屈しない店だ。

ビリントンは顔見知りらしい店員に「いつもの」と告げて、入口近くのテーブルに座った。俺たちもあとに続いた。ほどなくして、

ジョッキが三つ運ばれてきた。そのうち二つにビール、もう一つにはブランドーがなみなみと注がれている。

ピリントンは琥珀色の液体を一気に飲み干してから、話し始めた。
「かぁー！ たまらんなあ」

大口を開けて、手首で口をぬぐい、顔をしかめて、ぷはぁ。

端正な顔立ちだが、こういう仕草はおっさんだ。

「さてと、次の大会まで四日あるよな。のんびり過ごすのはもったいない。ジェシカ、道場に行つて腕を磨いたらどうだ」

「道場？」

「攻撃魔法の命中率が低いだろ？ あと火炎以外の攻撃魔法を覚えとけよ。その辺、これから先は命取りになるぜ。短期集中で特訓しておくといい」

「ちよつと、なんで、私ばかりなのよ。コバーンはどうなの？」

「んー。こいつは勝手にやる奴だからなあ。コバーン、そっちはどうする？」

「そつだなあ… せつかくだから素手格闘術でも習うか」

そう、いまさら、技術や知識はいらない。

俺に必要なのは、持ち前の技術を素直に出せる体力だ。この体はまだまだ弱すぎるから。

「で、ピリントン。そっちは？」

「俺は、こづかい稼ぎだな。知り合いの道場で剣を教えれば、飲み代にはなるんでね」

この村の道場は、住み込みで鍛えるのが慣わしだ。

俺たちはその晩、正体不明になるまで酔っぱらってから宿に泊まり、土曜の昼に酒場で再会することを誓って、それぞれの目指す道場へ向かった。

三日間にわたる「地獄の特訓」が終わった。

大げさにいつているわけじゃない。格闘道場にあった「二泊三日・地獄の特訓」という商品名の修行メニューをこなしたのだ。入門時

に受けた説明は「柔道、空手、ボクシング、ムエタイ、サンボ等々、様々な格闘技のエッセンスを詰め込んだ集中特訓コース」というもの。

始めてみると初日から、柔道のオリンピック金メダリストみたいな人、伝説の空手王のそっくりさん、ボクシングの世界王者と瓜二つのキャラクターなど、俺がこのコースを考えた時にイメージしていた格闘コーチが、入れ替わり立ち替わりに現れては鍛え続けられた。

体力がなくなると、ビーンズを口に入れられて、不眠不休で身体を動かす。まさに地獄の特訓。気のせいか、手足が太く、胸板が厚くなった気がする。事実、レベルも少し上がった。

「ビールとピスタチオ」

酒場で好物を注文した。まだ、太陽が昇ったばかり、この時間に飲むビールはたまらない。ゲームの開発現場で徹夜をして、帰りがけに飲むあの一杯を思い出す。

冷え冷えの一杯が運ばれるやいなや、俺は泡に口をつけ、目をつぶってジョッキを傾けた。爽やかな苦みと、のどをこするシュワシユワな感触を堪能する。

「ぷはあ〜」

ジョッキを置いて目を開けると、テーブルを挟んで、悲しげな目つきの女性が座っていた。

「まだ、子どもなのに立派な飲みっぷりねえ。本当は何歳なの?」
なんとなく、見覚えのある顔だが?

ああ、この前、テーブルを回っては、相手がまわすにからんでいた迷惑なお方だ。

こりゃ、やばいのに捕まっちゃったかな。

「いいのよ。返事はしなくても、ただ、話を聞いて欲しいの。それくらい、いいよね」

俺が、いいとも悪いともいわないうちから、彼女は語り始めた。
「いつも通りの狩りだったの。みんな、その日会った同士だったけ

ど、話は合ったし、楽しくやってたのよ。その時の戦闘も、たいした相手じゃなかったわ。普通にいけると思ってた…けど…そうしたら…」

そうしたら、いきなり全身に衝撃が走り、目が覚めた時には四人パーティのうち、二人は消えて、もう一人は魔物に右腕から肩までを喰いちぎられていたそうだ。運良く振り回した剣が敵の首をはねて、戦闘は終わったが、死にかけて仲間を前に何もできなかった…らしい。

「その時、リカバリンを持ってなくて。おぶって、次の村まで歩こうとしたけど、また魔物が出てきて」

背中から襲いかかってきた魔物は、傷だらけの仲間を奪い取り、目の前で喰らい尽くしたという。そして、満腹になってその場を去っていった。

後には、首から上だけになった男を残して。

「リッチって。最後にあたしの名前を呼んだの。そして、光になって、空気に…溶けてった」

たまたま、通りがかったベテランプレイヤーに助けられて、この村に来たという。

結局、二時間以上、彼女の話聞いていた。というより、飲みながら、たまに相づちを打って、適当に聞き流していた。

ゲーム内だけでなく、リアルでの思い出、彼氏のことや大学生活についても話していたが、だんだんと酔いが回り、それつが怪しくなり、最後は悲しげに笑っているだけになった。

そして、全身が薄青く発光し、徐々に透明になり、やがて、着ている服ごとその場から消えてしまった。

「消えちゃったな」

茫然としている俺の頭上から声が聞こえた。

ピリントンだ。悲しげにも、冷たげにも取れる口調で言葉をつないでいく。

「ひとしきり話して、気が済んだのさ。彼女は、この世界を必要と

しなくなっただろう」

「どこへ消えたんだろう？本当の世界へ戻ったのか」

「さあね。俺はコンピュータクターだからさ。本当も嘘もなく、この世界がすべてだ。それにコバーンのいう本当の世界なんてまだあるかどうか。今は俺もプレイヤー連中も同じ。この世界がすべて、だろう」

「ここで死んだら……いや、この世界にいる意味をなくしてしまったら、」

「消えちまうんじゃないの。元々、BLTに浸りっぱなしのバカデカ夫婦みたいな連中か。元の世界が嫌でたまらん奴なら、そんな心配はないだろうが」

「消えるプレイヤーって、多いのか？」

「ちよくちよくいるぜ。昨日も一人見かけた。さっきの女と似たような雰囲気だったな。人数が多いか少ないかはわからん。ただ、あんたについてだけはわかる。絶対に消えない。勘でしかないけど、この世界を必要としているか。この世界に必要とされている。そう、思う」

「二人とも、元気だった」しかし、早いわねえ。一番乗りだと思っただのに！」

ジェシカは悔しそうに笑っている。

三日ぶりに聞く声が可愛くてたまらないのは、重くシリアスな話の後だからか。

「さあ、コバーン。俺たちの現実だ。生き抜くための戦いへ出かけよう！」

「おう」

「ちよっと、なんか飲む時間くらいちょうだいよ！」

コロシウムは、半分以上埋まっている。

観客数は三百人強、まずまずの入りだろう。

取組表を見ると、俺たちの試合は大会の最後になっていた。

通常、注目度の高いカードほど後ろに回される。

俺のレベルからするとあり得ない厚遇。手強い魔物を当てられるのは確実だ。

控え室で、試合順を知ったピリントンは、うれしそうに笑う。

「メインイベントかよ。こりゃ、賞品はいいんだろうねえ」

「相手も強いだろうがな」

「どんな魔物と戦うのかしら？」

「そういうのはコバーンが詳しい。俺は出てきた奴と戦うだけが能なんぞね」

「魔物は、参加者のコロシウム戦績にふさわしい種類が、ランダムで選ばれるんだ。うちの場合、俺とジェシカは記録なし、ピリントンは？」

「数え切れないな。百戦はしてるが、負けたことは一度もない」

「んーと、なあ、俺とはここへ来たことないよな。誰とよく組んでたんだ？」

「ウオズ、魔術士のな」

ウオズってのは、プログラマの小津君が使っているキャラクターだ。確か、レベルは…

「あいつレベル九十九だったからさ。どんな相手が来ても怖くはなかったな」

つまり、今日は、このコロシウムで最強の魔物が待っているということだ。

少なくとも、中ボスクラス。ヘタすれば処刑シヨー。

苦い顔の俺とは正反対に、ピリントンははしゃぎまくりだ。

「ジェシカ、いざという時は俺が護ってやる。魔力の限り、魔法を撃ちまくってる！」

「まっかせて！ばつちり、修行してきたもの！」

「なんで、そんな明るいんだよ？」

「野良のバトルじゃないからさ」

そりゃそうだが、やられりゃ痛いし、怖いだろうが。

死ぬことだつてあるんだぜ？

俺たちの前にはバカデカ夫婦が激闘を繰り広げた。

相手の魔物はモフモフスラッグ、背中が長い毛で覆われた体長三メートルの巨大ナメクジだ。この日はマルチーズのように真っ白な毛色の個体が出てきた。

見た目に似合わず、素早く動き、飛ぶように襲いかかってくる。覆い被されると、まず逃れることはできない。重い肉塊が密着してきて、滲みだしてくる消化液に溶かされる。

この日の試合もそうだった。

「ぶおぐわー！」

試合開始直後、おっさん魔術士の悲鳴が響いた。

ナメクジに押し掛かれたのだ。

モフモフとした毛むくじやらの巨体がどっかに乗っかり、おっさんの首から上だけが出ている。まるで、大きな毛布で寝ているようだ。ひどい悪夢でうなされながら。

超体育会系お姉様が、力ずくで魔物を引き剥がしにかかった。たっぷりと水分を含んだ図体は数百キロ、いやトンの単位に達しているもおかしくない。

お姉様はナメクジの胴に腕をまわして、大地を踏みしめた。

「ほんぎゅわー！」

気合い一発！お姉様が真後ろに体を反らせた。

白い巨大雑巾が宙を舞った。

しかし、この魔物、空中で体をひねって腹側から着地し、間髪入れずにジャンプしてきた。

お姉様はおっさんを抱えて跳ね逃げる。

さらに飛ぶナメクジ、跳ぶバカデカ夫婦。

さらに追う毛むくじやら、逃げるハゲと筋肉。

試合開始後数分、コロシアムの地面はナメクジの粘液で、一面トロトロに濡れ光っている。

柔らかな土が敷いてあるので、ぬかるみ、容易に足を取られる。これ以上、逃げてはいられないと腹をくくったか、夫婦はナメクジを正面からにらみつけた。

おっさんが大きく息を吐いて呪文を唱え始め、同時にお姉様が剣でナメクジを威嚇する。

軟体動物なりに気配を読んだか、飛びかかるのを止めて、ギリギリと距離を詰め始めた。

「うらっしゃー！」

お姉様が剣を掲げてジャンプした。

ナメクジの背中に飛び乗り、頭を目がけて剣を振りおろす。クジラの潮吹きよろしく、大量の液体が飛び散った。剣は巨体を突き抜けて、地面に突き刺さっている。

お姉様が地面に飛び降りると同時に、おっさんの怒鳴り声が響いた。

「ガランザン！」

雷撃系の最強魔法だ。

術者の魔力と体力のすべてを一撃に込めて放つ、捨て身の大技。こいつを放った今この瞬間、おっさんの体力はほぼゼロに近くなっているはず。

もしも、反撃にあえば、確実に死んでしまうだろう。

ナメクジの脳天に突き刺さった剣が、避雷針の役目を果たした。

モフモフスラッグは、強烈な雷撃で全身の毛から発火。地面に固定されたまま、じたばたと動き、やがて絶命した。

バカデカ夫婦も地面に倒れていた。

救護班がリカバリンやビーンズを持って、あわただしく駆け付けていく。

ジェシカが不思議そうにつぶやく。

「え、なんで？」

ピリントンが説明してくれた。

「地面が濡れてたからな。感電したんだよ」

土にたつぷりと滲み込んだ粘液のせいで、共倒れになったようだ。夫婦二人ともリカバリンで復活したが、公式試合結果はダブルノックダウンに終わった。

「惜しい試合だったな」

そう、俺がいうとブリントンは笑いながら返した。

「ああ。ガランザンが決まった瞬間、飛び跳ねればよかったのにな。参加賞のみ、ご苦労さんなことだ。でもさ、これでわかったら。野良のバトルと違うんだよ」

「ああ。必ず、すぐに救助してもらえる」

「そうだ。そりゃ、痛いのも、熱いのも、苦しいのも嫌だ。でもな、死にっぱなしということはない。気楽に行こうぜ！」

うん、その通りだ。リスクはない、勝てば丸儲け。悪くない勝負だ。

いよいよ、俺たちの出番だ。

対戦相手の巨体を見て、ブリントンは頭をかいだ。

「こりゃ、厄介な」

魔物の名前はモノアイモアイ。全身が密度の高い石でできた、二頭身の巨人だ。頭のとっぺんからアゴまでで三メートル、そこから下が三メートル。イースター島にあるモアイ像を一つ目にして、太めの腕と細めの脚をくつつけたような姿をしている。

こいつの攻撃は持ち前のバランスの悪さだ。

重心が上にあるため、不安定度は酔っ払いなみ。一歩進むたびに大きく傾くし、時々倒れる。倒れるとジタバタする。下敷きになればもちろん、手足に当たるだけでも重傷はまぬがれない。

一つ目の巨人は、バランスを取るように手を宙に泳がせて、ゆっくりと前へ進んできた。

今にも倒れそうだ。

ブリントンはシリアスな口調になっている。

「どう攻める？」

「攻撃魔法しかないだろう。それから、倒れた時に目玉を斬りつける」

「定石だな。氷と雷なら、俺もちよつとは撃てる。コバーンは？」

「俺は氷だけだ。基本、刀とジェシカの補佐に回るよ」

「了解」

モノアイモアイの弱点は、でかい一つ目だ。

それ以外の場所は、見ての通り岩の塊。剣も魔法もダメージを与えられない。

しかし、闇雲に目を狙っても倒せはしない。ころころと変わる瞳の色に応じて、攻撃を使い分ける必要がある。瞳が赤い時には火炎系、青い時には氷結系、黄色い時には雷撃系、黒い時には物理系の属性攻撃しか効かない。

俺はジェシカのそばへ行き、攻略法を伝えた。

「いいか、魔力をムダにするなよ。瞳を見て、確実に使い分けていこう」

「まかせといて！特訓の成果、見せたげる！」

ジェシカが雷撃魔法ガララを撃った。

手のひらから放たれた稲妻は、一直線にモアイの額に当たった。黄色い一つ目がこちらをにらんだが、目的的中しなければダメージはない。

「あゝもゝ、色はあつてたのにい！」

口をとがらせつつ、さらに同じ魔法を撃った。また、外れた。

モアイは上半身を大きく左右に揺らして、こちらへ近づいてくる。巨大な足が着地するたびに、乾き切っていない地面から湿った土が跳ねた。

ジェシカが二発目を放った。今度は目尻に当たった、惜しい。

反対側からピリントンがガララを放った。こちらは見事に命中！

モアイは、巨体にふさわしい重低音で呻き声をあげた。

「うおおおおおおおん」

瞳の色は赤に変わった。怒っているかのような。

俺はジェシカに指示を出す。

「次はバーナを撃て！いいか、焦らず、確実に狙って」
「わかってるわよ」

続けざまに三発。火球が空気を切り裂いた。最後の一発だけ、目に的中した。

モアイはかぶりを振って一吼えすると、大きく揺らいでこちら側に倒れてきた。

巨大な石頭が、俺の真上に落っこちてきた。

とっさに跳ね避けたが、逃げた先に今度は極太の腕が振ってきた。これも避けた。

その後もモアイはジタバタと体を動かしまくる。

どうやら、うまく立てないらしい。

そのたび、俺も、ジェシカも、ビリントンも、逃げまどった。

そして、三人とも手足のどれかに当たり、ダメージを負った。

大暴れの末に立ち上がったモアイは、相変わらず、ふらふらとしている。

瞳は黒、物理攻撃しか効かない状態だ。

俺たちは三人揃って、自らにヒリンをかけながら、巨人を見上げていた。

ビリントンが、いらだたしげだ。

「こいつの瞳が切り替わるきっかけは何なんだ？」

「時間だよ。三十秒から百八十秒の間隔で切り替わる。長さはランダムだ」

「つまり、わからんってわけか」

「ただ、色の順番は決まってる。赤、黄、青、黒、赤のローテーションだ」

「つまり、次の色に備えることはできるわけね。もう、知ってるなら早くいってよ！」

ツッコミが欲しいのか。当たらないや、意味ないだろう。

ビーンズで魔力を補給しつつ、攻撃を続ける。

攻撃も回復も魔力頼みだ。ビーンズの減りは早い。

戦闘開始から十分経過した頃、ビリントンが雷撃を連発で黄色い瞳に当てた。

モノアイモアイは両手で顔を覆ったが、黄色い閃光が走り、爆発音が轟いた。

巨人が両手を下げると、瞳は青に変わっていた。

「雷は終了！次は氷だ」

俺の声にジェシカが素早く反応した。

氷結系を連発で叩き込む。あせって足が滑っている。

そのおかげか、四連弾すべてが的中、素晴らしすぎ！

「コバーン！ビーンズ！」

「あ？」

「魔力ビーンズちょうだい。私の切れちゃった！」

俺はポーチから、なけなしの一粒を取り出し、ジェシカに渡した。

「ラスト一個だ。慎重に使えよ」

そんなやりとりをしている間も、ビリントンは氷結系を連続的中させた。

またもや、瞳が爆発、青い閃光が飛び散った。

俺は、倒れてきた巨体に飛び乗り、額に仁王立ちした。

彫りが深く、目の上のひさしが出ているおかげで意外と安定している。

指と爆煙の間から覗いている瞳は黒。そこへ、刀を突き立てる。

「うおおお！」

刀を振り上げた瞬間、風景が飛んだ。

石柱のような腕に払われて、コロシアムの壁に激突したのだ。ジェシカが駆け寄ってくる。

「大丈夫だ、ヒリンは使うな」

いちいち回復している場合じゃない。魔力は残り少ないんだ。完全にぶっ倒れた時にリカバリンで復活すればいい。

立ち上がって、左右に傾いている巨体を見ながら、ビリントンが

叫んだ。

「コバーン、もう一度、倒せ！俺がカタを付ける」

まだ、瞳は黒。彼の特技ならケリを付けられるかも知れない。
でも、どうやって倒す？

……そうだ！

俺は、ここに来てから、そのための修行をしたんじゃないか。あれさえあれば！

「ジェシカ、巨大化ビーンズ！」

「え？あ、はい！」

元気よく返事をした女魔術士は、いきなりモアイに向けて走り出した。

「あれ？いや、寄越せよ」

巨人の真後ろに立ってビーンズを口に入れると、みるみる内に巨大化、モアイと同じくらいの背丈になった。だが、これの効果時間はたったの五秒のみ。

使えっていう意味じゃないのに。

だいたい、ジェシカ、格闘技とかできたっけ？それ、一粒しかないだろう？

俺の心配をよそに、彼女は素早く両膝を曲げる。

え？

次の瞬間、明るいアニメ声が、巨体になった分、大音響でコロシムに響いた。

「ひざ、かつくーん！」

モアイが両膝について、四つん這いになった。

ビリントンが巨顔の真下へ向かって走り、ジャンプした。

「くそっ！」

見事に瞳を貫いた剣士は、不満げな顔でこちらへ来た。

「下からじゃ、体重が乗らないな。奴を仰向けにできないか」
元のサイズに戻ったジェシカが答える。

「でも、もう巨大化ビーンズないし……」

ひらめいた。

「ジェシカ、ビリントン、他のビーンズはあるか？」

「あるわ。透明とか、浮揚とか、よくわからないのなら」

「俺もな、変なものなら、いくつでも」

「それでいい。俺が合図を出したら、モアイの足下に景気よくまけ」
体勢を立て直した巨体が、ゆらゆらと向かってきた。

俺は奴の着地点をめがけて魔法を撃った！

「コルド！コルド！コルド！」

氷結系魔法を連発。よし、いまだ！

「まけ！」

色とりどりのビーンズが、凍り付いた地面にばらまかれた。

巨大ナメクジの粘液はつるつるだ。足を取られたデカブツは、仰向けにすっころんだ。

ビリントンが三段跳びのように大腿に走り出し、大きくジャンプ。

宙で前転してキリモミ状態で降下。

「うおおおお！」

剣がドリルのように突き刺さる。切っ先が回転しながら深く刺さり込んでいく。

黒い閃光がビリントンを包み、爆発！

「おっとー！」

我らが剣士は、爆風に乗って、俺とジェシカのそばに飛んできた。その肩を抱きながら、モアイを見る。

上体を起こし、片膝を立てて、立ち上がろうとしている。瞳が真っ赤だ。

「これで終わりよ！」

ボツ、ボツ、ボツ、ボツ、ボツ

ジェシカの魔法攻撃は、残念ながら空を切った。

目標がまたバランスを崩し、傾いだせいだ。

「どうしょー！もう、魔力ない！ビーンズも」

「あるか、ビリントン？」

「すまん、俺も手持ち切れだ」

どうする…手詰まりか。魔法が撃てない。ビーンズが切れた。

モノアイモアイがダメージを受けるのは、瞳の色に応じた属性攻撃のみ。

何か、方法は…何かを忘れている気がする、大事なのは属性…魔法は手段…！

「ジェシカ、すまない！」

「え？」

俺はジェシカのネックレスに揺れている深紅の宝珠をむしり取った。

引きちぎったチェーンが宙を舞う。

こいつの効果は、火炎属性魔法の攻撃力向上。つまり、宝珠自体が属性を持つ。

俺は、右手に宝珠を握りしめて、モノアイモアイの巨体を駆け上がった。

頭のとっぺんに登る。飛び降りる。

飛び降りざまに全身を弓なりに反らす！

「うおりゃー！」

気合いと共に、マンホールのような瞳に正拳突きを打ち込んだ。のめり込む拳。

俺は、真っ赤な閃光に包まれた。

目を開くと、ジェシカの顔が見えた。眉根を寄せて、心配そうな表情をしている。

その顔越しに見えるコロシアムの天井がまぶしかった。

「おはよー、コバーン」

「ああ…」

リカバリンでの復活後は身体がだるい。

「あの、ビーンズあるか」

ジェシカが、係員からもらって、口に入れてくれた。

「ビリントンは？」

「あっち」

係員と話し込んでいるようだ。しばらくして、冴えない顔でこちらへ来た。

「ご苦労さん」

俺は差し出された分厚い手をつかんで立ち上がった。

彼は頭をかきながら、吐き捨てた。

「賞品授与式とか、勝利の名乗りとかないんだってさ。試合時間が長すぎたそうだ」

「お決まりのセレモニーはいいよ。もらう物もらえれば。賞品はなんだった？」

「まだ、わからん。大量にあるから、お楽しみにだとき。宿で受け取れるらしい」

「もったいぶるな」

「結局、いつもの戦闘と同じだ。違うのは、宿代が村のおごりってこと」

「それくらいはしてもらわないと。観客から金を取ってるんだろっし」

「もう行こうよ。私、ビール飲みたい！」

観客席はもうガラガラだ。みんな、感想戦のために酒場へ向かったのだろう。

俺たちも、勝利の美酒を味わいに行こう。

その夜、宿のフロントには、見知った物が飾ってあった。

黄色に輝く箱だ。大きさは五十センチ程度。

宿の親父に聞くと、開運オブジェとして、部屋や店に置くのが流れているらしい。訊いてもいないのに、黄色は金運がつくのだの、このサイズの物は滅多にないんだのと熱く語ってくれた。そんな設定、BLTにないんだけどな。どこから来たんだ、俺は知らんぞ。

大会実行委員が用意してくれていたのは、宿で最高ランクの部屋

だった。

内装の豪華さと広さが売りだそうだ。勝利者へのサービスってとか。

俺は眠れればどこでもいいけどね。開発室のイスの上よりは、どこだって快適なもの。

部屋の扉を開けると、山積みの賞品が出迎えてくれた。

だが、素直に喜べなかった。いくつかの武器、防具、そしてビーンズ等の消耗品を脇役に、もっとも広い場所を取っていたのは、色も大きさも様々な箱だった。

ビリントンがピンク色の箱を手にとって、ぐちった。

「また、これかよ」

「キレイだけど、何なのかしら？」

「んー。まっ、意味のわかる物だけでも、チェックしようぜ」

それなりに良さげな武器もあるし、ビーンズだって、数と種類が揃っているようだ。

コスチュームを合わせたり、武器や防具の値踏みをしたり、仕分けながら話しているとあっという間に時間が過ぎていく。

そして、こういう場合は、自然とジェシカが仕切り始める。

「ああ、コバーン。そっちの山は明日、売りに行くものよ。持っていくのはこっち、着ていくのはそっちに置いて！」

「まだ、どうするか決めてないのは？」

「決めて！」

次にビリントンが訊ねる。

「倉庫に預けていくものはどこだ？」

「ああ、その山を作らなきゃ行けないわね。じゃ、そっちにしましよーん、あれ？」

ジェシカの動きが止まった。

視線の先を見ると、あの二足歩行ネズミがいた。

賞品の箱の前に、きょとんとした表情で立っている。

女の子…なのか？四頭身の幼児体型、巨大なリボン、つぶらな瞳、八重歯、グレーの髪、デニム地のオーバーオール、手袋、靴、長い尻尾。

やはり、シルエットはあの世界的に有名なネズミキャラクターにそっくりだ。

俺が観察している視線に気づいたか、ネズミっ娘は口を開いた。

「ラティ。あたし、ラティ」

それが、名前らしい。

「ラティちゃんっていうんだ。可愛いー！私はジェシカ。よろしく」手を差し伸べて握手しているよ。警戒心がなさすぎ。確かに、悪い奴には見えないが。

「ジェシカ、ヨロシク！ねえ、これ、テンカイ、イイ？」

「うん、いいわよ。ねえ、コバーン、テンカイって何？」

許可をしてから訊ねてくるなよ。

ラティは白い箱を指差して、小首をかしげていた。

テンカイって何だ？天界、転回？なんだろう。俺にもわからなかった。

ビリントンにふってみよう。

「知らねえな。でも、いいだろ。テンカイとかをさせてやれば、いない箱だろ」

ラティを見ると、まじめな顔で、箱の表面をなで、匂いをかいでいる。

テンカイに許可を出すと、意味不明の言葉というか、音声を口ずさみ始めた。

「♪ ■ ♪」

両手をポン！と叩くと、箱が白い光と共に消えて、アゲハ蝶が出現した。

「なに？手品？」

ジェシカがうれしそうにアゲハ蝶を目で追う。

なんだ、そりゃ。

その晩、ラティは俺たちの部屋に泊まった。
なお、出現した物のうち、動物や昆虫を外に逃がしたのはいうまでもない。

朝飯前に、直接、一緒に来ないかと話してみた。
謎の箱をテンカイするネズミっ娘、ゲーム内にいないはずの存在こそ、この世界の謎を解くカギになるかも知れない。
俺の誘いに、ラティは即答してくれた。

「うん、ラティ、オーケー！」

午後、新たな仲間と共にフィールドへ踏み出した。
草原には蝶が舞い、花が咲いている。

手を伸ばせば届くところに実のなった木々もある。
世界は昨日より、確実に華やかになっている。

7

ラティが加わってからの旅路は、笑い声が絶えないものとなった。
主に一名。ジェシカだけの話ではあるけれど。

彼女はラティの見た目と仕事の可愛さがお気に入りらしい。いつも、何かを話しかけている。ラティ自身は、基本的にポケットとかニコーツとかしているだけで、時折、ウンとかスンとか返すだけだいたい、この子、例の箱以外には興味を示さないようだ。

二人の姿は、公園で見かける、ペットと会話をしているおばさん、まさにあんな感じ。

それでも、仲がいいのは助かる。

ちなみにラティは戦闘には参加しない。正しくいえば、戦闘に無関係な存在らしい。

攻撃をしないだけでなく、攻撃が通じない。魔法の流れ弾は通過するし、どんな武器もすり抜けてしまう。根本的にこの世界の存在

ではないのだろう。

しかし、戦闘が終了し、戦利品に箱があつた時はいち早く駆けつけてテンカイをする。

テンカイをした結果、出現した物、虫や動物や草花は、その後、世界のあちこちで見かけるようになる。一体、どういう作用によるものやら。

この世界に来て何回の朝を迎えただろうか。出会いも事件もくさるほど経験した。

立ち寄つた町や村は十を越え、俺もジェシカもかなりレベルが上がっている。

最難関でも通用すると、実力評価に厳しいビリントンですら太鼓判を押してくれるほどだ。

いよいよ、その最難関ダンジョン、HOFの近くまでやってきた。町の名はホフサイズ。HOFまで半日見当に位置する。

名物はカジノ。ここにいる人々は、難所へ向けて不安と期待で一杯の者と、冒険を諦めて居着いた者、有り金をはたいて抜け殻になった者の三種類に分けられる。

良くも悪くも、人と情報の集積地だ。

ここからすぐの場所には、HOFに隣接された大規模なバザールがある。武器や防具をはじめ、種々雑多なアイテムが手に入るし、そこでしか買えない物も多い。

金さえふんだんにあれば、便利この上ない市場だ。そのため、多くの冒険者がホフサイズの町で、不要な品々を売り払う。

そんな場所にカジノを併設したのは、他ならぬ俺なわけで。自分でもひどいと思うが。

俺たちもご多分に漏れず、宿で一息ついてすぐ、中古アイテム屋へやってきた。

換金して、酒場なり、カジノなりで魂の洗濯をしようってわけ。それぞれのポーチから不要な武器や防具を取り出し、買取カウ

ターに渡した。現在は絶賛査定中、価格に文句がなければ金を受け取るのみ。

そして、残念ながら、ジャンケンの結果、俺が残ることになった。ジェシカとラティは町の見物、ピリントンはカジノへ猛スピードで足を運んでいった。

この、値踏みをしてもらう時間は、一人だどうにも間が持たない。

店内をうろついていると、同じようにヒマそうな客から話しかけられた。

いかにも話し好きっぽい、笑顔が張り付いたような細目の魔術士だ。

「あんた、HOFかい」

「うん、そっちもか」

この町じゃ、HOFとカジノ以外が行先って奴はいないだろう。

「ああ。先は長いよ」

「目と鼻の先だろ」

「そりゃ、入口はな。目指すのは、最下層のその下じゃないか」

「は？」

「知らんのか？幻のフロア、絶対存在キアラ」

「いや…すまん、教えてくれ」

「あら。あのさ、見たことないか？消えるプレイヤー。俺は二人見たことがある。酒場とダンジョンでね。一人は組んだこともある奴だった」

細目は、嫌な思い出を払うかのように、かぶりを振った。

「突然、薄くなって消えるんだ。死ぬとか戦闘不能とかじゃなく。存在自体がなくなる」

「ああ…」

以前、酒場で会った女のことを思い出す。

「HOF最下層、十三階のさらに下、そこにはあり得ないはずのフロアがあつてだな」

そんなフロア、聞いたことがない。少なくとも俺は作った覚えがない。

「そこに辿り着けば、絶対存在キャラ。つまり、永遠に消えないキャラクターになれるんだ」

「…その話、確かなのか？」

「さあ、正直、わからん。単なる噂話かも知れん。ただ…」

「ただ？」

「何もせずに消えるのはごめんだ。HOFの奥で死ぬだけかも知れん。だが、元の世界へ戻る方法などない…噂でもデマでも、信じてあがくのが人つてもんだろ」

「そうか。そうだな。その考え方も正しい、うん」

「しかし、あんた、そっち目当てでないとは、あれか、戦闘マニアか。ゲーム大好きって奴」

「そこまで能天気じゃないよ」

「じゃあ、何しにHOFへ？安全に暮らしたきや、適当な村に落ち着けばいいだろう？」

「人捜しだ」

「ああ、なるほど。仲間とでもはぐれたのか。それなら、あれに会うといい…ヨルレカ？」

「ヨルレカ？」

「いや、えーと、エリカ？いや、ヨーレカ？ユーレカだったけ？」

「おいおい、ちょっと待てよ、それって。」

「もしかして、ユーリカか？」

「なんだよ、知ってるのか。そのユーリカに会うといい。人捜しを手伝ってくれるそうだし」

「あんた、会ったことあるのか？」

「いや、噂で聞いただけさ。でも…」

「でも？でも、なんだよ」

「あせるなよ。でもな、この町の酒場に、ユーリカに助けられたつて子が働いてる。彼女を訪ねてみたらどうだい」

「名前、わかるかい？」

「確か…アジア？アシア？……アーシア！そう、アーシアだ」

「アーシアね。わかった、ありがとう。これ、取っといてくれよ」

俺は、思わずポケットに手をつ込み、回復ビーンズを渡してしまった。

店で金を受け取って、そのまま酒場へ直行したのはいうまでもない。

適当なウエイトレスに声をかけて、クリームソーダを二杯注文した。

チップをはずんで、アーシアに運んでてもらうようにいい添えて。

アルコールを避けたのは最低限の気遣いだ。初対面だし、女性だし。

すぐに、うまさうな泡を盛ったグリーンのグラスがきた。

トレイを手にしているのは、長身の少女武道家だ。

なれなれしくドリンクを勧める初対面の子どもにとまどっていたが、ユーリカの名を出すと、笑顔を見せてくれた。ありがたいことに、彼女について話したかったらしい。

あの出来事、みんな【異変！】と呼んでいるが、あれが起きた時、ユーリカとアーシアは、別々のパーティでHOFに潜っていたそう
だ。

「仲間みんな消えてしまって、一人になりました。その時、魔物に囲まれて。もう、無我夢中でひたすら防御だけをしたの。殴られても、噛まれても、回復だけを続けて…ううん、痛かったはずだけど、パニックってたからかな。何も感じなかった。でね、最後の回復ビーンズを口にして、もう終わりかなと思った時」

ユーリカが現れたそうだ。

彼女も仲間を全員なくしたが、諦めずに戦い、地上を目指してい

たという。

「私ね、HOFなんか潜ってたけど、そんなにレベル高くないんですよ。強い友だちが付き添ってくれてただけで。だから、一人残されたままならダメだった。絶対に」

あいつ、そんなに強かったのか。

「ユーリカさん、格好良かったなあ。魔物を蹴散らして、私の手を引きながら、ぐいぐい進んでいったの。背が高くて、セクシーで、次々にカンフー技を繰り出して…」

俺の記憶にあるリアル彼女は、身長百四十八センチの元気だけど非力な女性だった。

「最後にここへ来てくれたのは十日くらい前かな。いま、HOFの変な話が流れているでしょう。絶対存在キャラになれるとか。噂を信じて戻って来ない人がたくさんいるから、説得して回ってるんですって」

「説得？HOFに潜るプレイヤーを？」

「ええ、それが自分の役目だって。『いつか仲間と出会えるかも知れない』『元の世界に帰れるかも知れない』、みんな、そういう想いをなくしてる。消えない身体や永遠の命は希望じゃない、絶望したから、そんな噂にすがっちゃうんだって」

あいつ…

「思わず、なぜそんな頑張れるのって訊いちゃった。そしたら、こういつてくれたの」

「うん」

「大切な人を待っている。【異変！】の直前、その人はHOFに行くといっていた。会う約束をしていた。伝えたいことがあるし、必ず会えると信じてるから。生き抜くんだった」

いかん、涙が。

「コバーンさん、あなたがその大切な人なのかな。ユーリカさん、きつと待ってるから。私、応援してるから、絶対に行ってあげてね」
アーシアは俺の手を強くつかみ、励ましてくれた。

俺、心の中で号泣…

「ありがとう。アーシア。あの、必ず、また来るから。今度はユーリカと一緒に」

「うん。クリームソーダ、ありがとう」

それから、しばらく酒を飲んだ。彼女の思い出を頭の中で転がして、つまみにして。

外へ出た、もう暗い。宿へ帰るか、カジノへ行くか、考え時だ。夜道を歩きながら、アーシアの言葉を反芻する。

ゆりか、いや、武道家ユーリカ。彼女が確かにこの世界にいることがわかった。

それだけでも、ここまで冒険をしてきたかいがあった。

「うぐっ？」

いきなり、背後から抱きつかれた。

首から頸動脈にかけて太い腕が巻き付き、一気に絞めてくる。

いわゆるプロレスのスリーパーホールド、裸締めの体勢だ。

俺は百六十センチにも満たないガキ。背後の奴は、二メートルはありそうな雰囲気だ。

まずい。一気に引き上げられた。足が宙に泳ぐ、逃げられない。

そのまま、店の裏手、人気のない道へ持つて行かれた。

そこには、もう一人の影があった。一人？いや一匹か？…そいつが俺の足を持つとうとする。

連れ去る気か！

目の前の奴を両足で蹴り、その反動で下半身を大きく上に振った。俺を抱えているバカ野郎のスネに、両足の力カトをめり込ませる。腕の締めがゆるんだところで、上半身を左右に動かして、肘であばらを打つ。

体格差があっても、ツボには無関係。敵の力は一気に抜けた。

みぞおちに肘鉄を食らわして、地面に降り立つ。

ダッシュして距離を取る。

振り向いて、あぜんとした。

二人とも人型をしているが、人ではない。しかし、魔物、でもない。

一人はウサギ型の魔物イビルラビットに似ていた。長い耳、黒い鼻……。だが、全身のシルエットは人間だ。

俺を抱えていた奴は、脳天に一本角を生やし、額に大きな第三の目がパチクリとしていた。こいつも魔物キプロスオーガとそっくりだ。もつとも、あれは三メートル以上あるし、もっと筋骨隆々、こんなに弱っちくはない。

二人？二匹？二頭……とにかく、こいつらが一気に俺に襲いかかってきた。

ウサギ男が声を上げた。

「このガキ！」

その瞬間、火炎魔法が夜闇を切り裂いた。

「バルガ・トルネードオオ！」

竜巻状の火炎が、俺とウサギ男たちの間を通り過ぎる。

ジェシカだ。

誤爆する！と叫ぶ間もなく追撃がきた。

燃えさかる竜巻が三発続く。

助けはありがたいけどさ、町中で撃つなよ。

ウサギと三つ目を追い払うだけでなく、俺の肝も冷やしてくれた。

「大丈夫だった？」

駆け寄ってきたジェシカに、俺は負傷箇所をなでながら答えた。

「ケツが熱い。いい感じにあぶられた」

ラティが不思議そうな顔で俺のケツを見つめていた。

宿の主人やメイドにこの出来事を話すと、意外な答えが返ってきた。

最近、こういう拉致事件がよくあるらしい。

人とも魔物ともつかない、いわば、半人半魔の目撃例も増えているという。

ピリントンが笑いながらいった。

「確かに中身を知らなきゃ、簡単にさらえると思っぜ。お坊ちゃま
うるせー。カジノで軍資金を稼いで来てなきゃ、殴りつけている
とこだぜ。」

半人半魔、ラテイ、謎の箱…そして、噂だけかも知れないが、H
OFの十四階。

どれも元のゲームにはなかった話だ。

俺が知っている世界では、なくなりつつあるのか。

8

「うわー、縁日？文化祭？ちょ、ちょ、ちょ、先、見てくるね。じ
ゃー」

ジェシカが大喜びで駆け出して行った。

ラテイもちよこまかについていく。

ここはバザール、HOFに隣接する青空マーケットだ。

プレイヤーは、一人あたり二メートル四方の敷地に店を出せる。

出店数は日によって違うが、今日はざっと見渡したところ、三十
店ほどだろうか。

ゲーム内アイテムの店がほとんどだが、職業ごと、レベルごと、
アイテム種類ごと、レアのみ、アンティークのみ等々、それぞれに
特色を出した品揃えを競っている。

中にはコピー品、違法改造品専門の困ったちゃんもいるが・・・
とにかく、いくらでも時間をつぶせる場所には違いない。

この手のフリーマーケットは、左右に出ている店を冷やかしながら、
ら、ゆつくりと歩くのが楽しい。男二人、お祭り気分のジェシカを
先に行かせて歩きだした。結構、人いるねとか、適当なことをだべ
りながら。

「ここに寄ってこっ」

ビリントンが立ち止まった。なんだ、この店。

ゴザの上に太ったおじさんがあぐらをかいている。眠っているようだ。看板もない。

「研ぎ屋さんさ。腕は俺のお墨付き。コバーンも刀、預けたらどうだい」

店のおじさんが、ちらりとこちらを見た。

刃物研ぎか。俺は、次々と武器を新しいのに変えていくから、使ったことないな。

「いや、止めとくよ。装備している刀も、そろそろ変え時だし」

「そうか。剣つてのは、ある程度以上になったら攻撃力より、手への馴染みなんだがな。お気に入り的一本に焼きを入れて、研いで使い続ける。そういう境地、わからないかね」

「俺は、まだ、ある程度以上になってないんだよ」

「うぶな振りするなよ。ガキなのは見た目だけで十分だぜ」

ビリントンは店の前に剣をおいた。すぐに、おじさんは手を伸ばした。

刀身を陽にかざすようにして、上から下まで舐めるように見ている。

「兄さん。大事に使ってんなあ」

「当然さ。分身みたいなもんだ。ここんところ、お疲れなんでさ。ほぐしてやってくれ」

「ん、まかせい」

おじさんは砥石に水をかけて、刃先から研ぎ始めた。

ビリントンは中腰になって、楽しげに職人仕事を見つめている。しばらく、無言の時間が流れた。

縁日で金魚すくいのプールに見とれる少年のような、相棒の背中に声をかけた。

ここしばらく気になっていることについて、話しかけてみた。

「この世界で消えてない連中って、ゲームにはまってるか。仲間と

か、目的とか、こだわりがある奴ばかりだよな」

そのままの姿勢で言葉を返してくる。

「ああ。今に至っても残ってるのは、そんなプレイヤーばかりのよ
うだな」

「あのさ。ジェシカは大丈夫なのかな」

「なんか、あつたのか」

「いや。前から、なんとなく気になってたんだ。あいつ、これが初めて
のオンラインゲームらしいし。会った時は初級レベルだったろ
う」

「確かにキャリアだけで見れば、ゲーム世界にしがらみも思い入れ
もないはずだわな。その辺、消えてった連中と似てるか…でも、ま
あ、彼女は心配ないだろう」

「なんで、そう思う？」

「勘さ。なんつーか、先の心配をせず、一瞬一瞬を全力投球で生き
てるじゃないか。それに今じゃ、俺やあんたとの生活を気に入って
るみたいだしさ」

「なら、いいんだが」

おじさんが刀身を裏返した時、ビリントンは心底からうれしそう
な表情を見せた。

俺と辛気くさい話をしているより、よほど楽しいらしい。

この愛剣家、しばらくここを動きそうにないね。一人で店を冷や
かすでしょう。

俺は歩き出した。刀の掘り出し物とか、面白いビーンズでもあれ
ばいいが。

いくつかの店を見た後、武道家用アイテムの専門店が止まっ
た。

ユーリカに再会した時のために、プレゼントを買っておこう。
やむを得ないとはいえ、彼女なのに、ずいぶん放ったままだも
んな。

そして、また、歩き出す。

ん、うるさいな。ああ、吟遊詩人ががなっているのか。創作ダンス、詩集、漫画同人誌、そんなものまで売っているのかよ。ビーンズ、ネックレス、ヘアバンド、クレープ、アクセ…

え！クレープウ？

そんなもの、このゲームになかったはずだぜ？

いかにもスイーツ屋らしい、小柄な女性が店番をしている。背丈は俺と同じくらいだ。

「クレープって、あのクレープかい？」

「あのがどのかわかんないけど。フルーツやクリームを薄い生地で巻いたお菓子よ。具はイチゴ、リンゴ、生クリームの三種類、ミックスもできるよ」

「いつからやってんの？」

「今日から。イチゴとリンゴと小麦は十日くらい前に見つけてたんだけどね。おととい、やっとミルクを出す牛を発見してね。めでたく開店のはこびってわけ」

テンカイは、こういう影響をもたらしているのか。

ものは試しに、イチゴクリームを注文してみた。

盾をフライパンに、剣をヘラがわりに器用に生地を作っている。

「手際いいね。ずいぶん練習した？」

「本職のクレープ屋だもの。こっちの住人になっちゃう前はね。近頃、色々な物が世界に増えてるから、ほうばうに食べもの屋ができるわ。ここにもお好み焼きやカットフルーツの店が出てるから、行ってみたら……あい、できあがり」

代金を払って、さっそくかぶりついた。

フワフワ感が弱いのは、玉子がないせいかな。甘味はフルーツ頼みね。うん、結構いける。

買い食いしながら、市場まわりつてのはいい。なつかしい感覚だ。まさか、HOF近くでこんな目に会えるとは。

おっ、目の前を歩いているあれは、ニワトリ。今のお姉さんに知らせようか。次は玉子入りが食えるように。

クレープが授けてくれた幸せな気分は、ジェシカの声でかき消された。

「コバーン、コバーン！」

ずいぶん、血相を変えて走ってくる。額の黒いのは…えっ…カブトムシ？

「お金、ちよーだーい」

は？

「お、おい。どうしたんだよ」

「こっち来てえ！」

手をつかんで、ぐいぐい引っ張りやがる。どこへ連れていく気だ。連れていかれたのは、あの謎の箱ばかりを扱う店だ。

ラティが、鬼みtainな顔をしたジイサンに首根っこをつかまれている。

状況は一瞬でまるわかりだ。弁解のしようもない。

俺は、いわれる前に謝った。

「えーと。で、このネズミっ娘がダメにした箱の代金は、おいくら？」

……三つだけでよかった。意外と安くついたし。

テンカイ結果は、ニワトリ、カブトムシ、サトウキビ。

まあ、これで、今度は砂糖入りクレープが食えるかも知れないんだ。我慢しよう。

ん、ラティ、ちよつと落ち込んでる？

さつき、ジイサンに怒られたのが効いたようだ。

これまで、ちゃんと怒る大人がまわりにいない人生だったか。

「食いかけだけど、どうだ？」

俺はクレープを差し出した。ネズミっ娘はぺろっと平らげて笑顔になった。

おっと、ジェシカが反応しちまったか。

「ねえねえ、それ、どこで売ってるの？」

ああもつ、よだれ垂らしているよ。

俺は、両手にネズミと食いしん坊を連れて、来た道に戻ることにした。

ジェシカが欲張りな注文をする。

「全部入りってできる？」

「うん、大丈夫。特別に、さっき手に入れた、これも入れたげるね」
クレープ屋のお姉さんが右手に掲げたものは真っ白な玉子！

ジェシカの欲張りな注文に、超サービスで返してくれたってわけだ。

次の瞬間、俺、ジェシカ、ラティ、お姉さんが同時に声を上げた。
「ああっ！」

パンツという何かが破裂するような音が、店の背後から轟いた。
魔物がお姉さん突き飛ばして、店に乱入してくる。

「ジェシカ！お姉さんを頼む」

俺は声を出しながら刀を抜き、魔物と向き合った。
ドリルオックス、額に巨大なドリルを生やした牛だ。前足で地面を蹴り、頭を低くしている。こんな至近距離で突進されたら、確実に跳ね飛ばされる。

ぶおおおおおおお！

鳴いた。

来る！と思った瞬間、聞き慣れた気合いが聞こえた。

「おりやつ！」

目の前には、剣を抜き払った体勢のビリントンがいた。

足下には、前足を二本とも斬り落とされた魔物が、顎から地面に突っ伏している。

その首筋を目がけて、とどめの一撃が加えられた。
ビリントンが顔を上げた。ギャラリーからは拍手まで起こっている。

そこで髪の毛をかきあげて、決め顔かよ。

「ああ、すいません。ちょっと通してください。はいはい、ごめん

なさい」

人だかりをかき分けて、ブルーのワークシャツを着た、マッシュルームカットの男がやってきた。なんとも印象に残らない顔立ちだ。顔見知りだろう、ギャラリーと言葉を交わしながら、歩いている。「うん、また、ドリルオックスです。困ったもんです。結界を掘るわ、砕くわ」

ワークシャツは、魔物が入ってきたとおぼしき場所にしゃがみこんだ。

謎の言葉を唱えながら、指で地面になにやら書き込んでいる。

しばらくして、立ち上がり、かたわらで作業を眺めていたピリントンと話し始めた。

知り合いなのか？

二人して、俺の方を見ている。笑い合っている。なんか腹立つ、こつち見んな。

今度はジェシカを見ている、いや、視線が低いからラティカ。俺らを見ながら、ひとしきり会話を楽しんだ後、ワークシャツは戻っていった。

「コバーン、ちょっと」

手招きをされるままにピリントンのそばへ行く。

「お礼とお詫びがしたいからバザール本部に寄ってくれたとき。俺らとクレープ屋さんで」

了解。特に断る理由もない。

去り際に、ワークシャツが呪文を唱えていた場所を見た。小さな石碑が建ててあり、魔方阵が描かれている。ルーゴアのところで見たのと同じものだ。

お礼とお詫びが形になっていることを期待しつつ、バザール管理本部へと足を運んだ。

バザール敷地の端に建てられた、日当たりの悪い、屋根のない掘立小屋だ。

地面に丸テーブルとイスを直接置いただけの会議室、ゴザが敷かれただけの休憩所、長机とイスが一つずつの受付、これらが薄い板のついたで仕切られている。

クレープ屋のお姉さんは、受付のイスへ案内されていた。軽く挨拶をして奥へと進む。

俺たち四人は会議室に通された。丸テーブルに広めの間隔で座る。さっきのワークシャツがそくさと部屋に入ってイスに着いた。その肩に、ちよつと妙なものがついている。

虫？

いや、あのバランスの悪い体型は、モノアイモアイだ…体長は十センチくらい。

こいつ何者だ、いったい。

ワークシャツは全員を見回してから話し始めた。

「わざわざ、ようこそ。まずは自己紹介します。バザール実行委員会のウオズ42です。ウオズと呼んでください。実は、ビリントンさんとは、前にパーティを組んだこともあります。それから、かつては、彼と働いてました。現実で」

はい？俺と…？…ウオズ……あ！

「小津君か！」

「ええ、そうです。現実ではB L Tのプログラマでした。ビリントンさんと組んでいた時は、レベル九十九の魔術士。今はシステムメンテナンス用キャラクターです」

「イス取りペントハウス？なに、それ？」

ジェシカが口をはさんだ。わざと間違ったのは、話に入れずにいらついている証拠。

こらえ性のなさは一流だ。

でも、その程度の嫌みは、ウオズには通じない。

この男は鈍さが強さ。相手がバグであれ、人であれ、すべてに論理で挑むタイプだ。

「色々な不具合やほころびを直す仕事です。さっきのような結界の

壊れとか」

ほら、冷静に返してきた。バグ修正か。現実と同じような仕事をやっているわけだ。

「ねえ、小津君。さっきやってた結界の修正だけどさ」

「いえ、あの、ウオズと呼んでください」

「ああ、すまん、ウオズ。長い呪文を唱えて、なにか描いていただろう。あれは魔法？」

「魔法じゃありません。ありふれたデバッグです。唱えていたのはC言語です。それから、地面に描いたのは魔方阵です。あれを描くと、作った結界が作動を始めるんです」

なるほど。システムメンテナンス作業が、この世界的に最適化されているわけか。

「なぜ、そんなキャラクターになっただんだ？」

「そのお言葉はそのまま返します。たぶん、あなたと同じ理由です。あの時、このキャラクターでログインしてただけというね。違いますか」

「そうか、その通りだ。で、そのキャラクターだと、どんなことができるんだい？」

「そうですね。プレイヤーキャラクターの登録内容やデータベース情報を読み取れます。例えば、ジェシカさん……」

ウオズの顔が厳しさを帯びた。

にらみつけられたジェシカの表情が変わる。

「な、なによ」

あら、えらく動揺しやがって。何か隠し事でもあるのか。

「おや？…ポーチにお菓子がいくつも入ってますね。購入したのはついさっき」

「なっ、なによ。実は、みんなで分けようと思ってたのよ。もう」
ジェシカはポーチから、ポップコーンとポテトフライ、ドライフルーツを出した。

くらえとばかりに、テーブルへばらまく。

ポップコーンはハチミツ味、結構うまい。

ウオズだけが口にせず、話を続けている。

「ただ、このキャラクターは戦闘ができません。どんな攻撃も通り抜けます」

「この子もそうよ」

ジェシカは隣に座るラティを抱きかかえた。

ウオズがにこやかに挨拶をした。

「はい。ラティさん、こんにちは、はじめまして」

「コンにちハ。ラティだよ」

「えーと、こうかな？…… @■#%●▼*」

ウオズが壊れた？と思ったが、次の瞬間、ラティは一瞬驚いたあと、見たこともない笑顔を見せて、しゃべり始めた。

「●？#%\$@@∞」

高い電子音というか、ラジオのチューニング時の音というか、なんとも表現し難い謎の音声で、二人の会話は続いた。俺を含めた、その他大勢はあつけにとられるだけで。

しばらくしてウオズは納得したように、深くうなずいた。

「なるほどね」

思わず、声をかけてしまう。

「なあ、何語で話してたんだ。あと、何を話してたんだ？」

「通信プロトコル……といっても、みんなわかんないですよ。えーと、簡単にいうと、ラティが本来使ってる言葉で話していました」

ジェシカが訊ねた。

「ウオズは、ラティの知り合いなの？」

「直接、会ったのは今日が初めてです。でも、プログラマの間ではラティは有名人でした。彼女は、ハッキング集団ラッツのマスクットキャラクターです」

まったく知らない名前なので、説明をお願いしてみた。

ラッツ(Radical Attacking Techno-kind Syndicate)とは国際的なハッキング集団。プ

ログラマからは、一種ヒーロー視されている連中らしい。

「彼女はラッツの主要メンバー数人が創り出した、人工知能搭載の仮想キャラクターです。企業や研究所のサーバから、目的のデータを盗み出すために作られました。見た目は、作者の好みで萌えっとしてますけど。高機能な情報生命体です」

ビリントンが口を挟んだ。

「でも。なんで、このゲーム世界にいるんだ？」

「聞いてみますね。% \$ d # ● ？」

また、交信が始まった。

しかし、この言葉？を話している時のラティは、普段の姿からは信じられないほど、豊かでうれしそうで知的な表情を見せる。

ウオズがこちらに向き直った。

「わかりました。例の【異変！】が起こった時、ラッツはうちのゲームサーバを踏み台にして、ある施設をハッキングしていたそうです。それで【異変！】の時、彼女がこの世界に落ちこちてきたんでしょう。その時に、ダウンロード中だった圧縮データと一緒に。それが、そこら中で見つかる、あのカラフルな箱です。テンカイというのは、そのデータを展開するという意味だそうです」

ビリントンは、さらに質問を続けた。

「それにしても、ハッキング先ってどこなんだい？フルーツ、花、虫、動物とか、出てくるのはそんなのばっか。機密とはとても思えない」

ウオズはまた、ラティと二人きりの会話を始めた。

次に顔を上げた時には、少し興奮した顔つきになっていた。

「国際航空宇宙局の中央サーバです。十年前、秘密裏にある宇宙船が打ち上げられました。地質学や生物学、海洋学、環境学、地球工学、地球化学等々、そこには材料さえあれば、地球を丸ごと復元できるだけの知識とデータが詰め込まれていました。プロジェクト名は「ノア」。地球の破滅に備えた、箱船のつもりだったのかも知れません」

おいおい、それって、もしかして！

「そんな怖い顔しないでください。【異変！】との関連はわかりません。破滅への備えというのは、ラティというか、ラッツの推測に過ぎませんから。とにかく、ラッツは、そういうプロジェクトの存在を世間に発表するため、動かぬ証拠として、データの入手を企てたそうです」

ウオズは、ここでまたラティと交信を始めた。

「あ？　■　％　\$　∴　そうか。それで、ですね。世界中に散らばったデータをすべて見つけて展開するのが、彼女がこの世界に来て、やると決めたことだそうです。すべての圧縮データは開かれたがついて、自分にしかその願いをかなえられる者はいないから……だそうです」

ラティって、熱い子だったんだ。

ウオズの顔つきが変わった。さっきまでの熱さが消えて、力が抜けたというか。

「ラティの話はこれくらいでいいですか。できれば、僕の話もしたいんですけど。あの、ウオズ42の数字部分なんですけどね」

ああ、ラティについては、終わったのね。なのに、まだ話す気が、君は。

俺と同じことを思ったのだろう。ピリントンが手を挙げて、ウオズを制した。

「なあ、ウオズ。俺たちと一緒に来るだろ？　続きはさ、また、話してくれよ」

ナイス、ストップ。

俺もタイミングを逃さずに立ち上がり、右手を差し出した。

「これからはコバーンと呼んでくれ。ウオズ！」

新たな仲間の加入に、ラティは見ている方がうれしくなるような笑みを浮かべていた。

部屋を出る時、ウオズに訊ねてみた。

「ところでさ。その肩に乗せてるのは…何？」

「ん？ああ、これ。知ってますよね？モノアイモアイ」

「それはわかってる。どうしたの、それ」

「魔物データを抜き出して加工したんです。可愛いでしょう」

可愛い…のかなあ。まあ、美意識は人それぞれだ。

手に取って、頭を指でなでてやっている。

「欲しかったら、作ってあげますよ。どんな魔物でも」

いや、結構。ちょっと趣味に合わないなあ。

「ところで、ウオズ42の由来ですが、本当に知りたくないですか？」

「そのうち、ゆっくり聞かせてくれ。今はもう一度、クレープを食べてくる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2359z/>

MMO！ ～ Massive Memories Of 【！】 ～

2011年12月9日05時48分発行